都留文科大学研究紀要　第87集（2018年３月）
The Tsuru University Review, No.87（March, 2018）

古代ギリシアにおける教養・教育の理念に関する研究（９）
― W. イェーガーの『パイデイア』に学ぶ ―

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (9):
Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑　　潤
HATA Jun

Ⅰ．本研究の課題と構成について

１．本研究の経緯と小論の対象について

本研究は、ドイツの古代学者であるW. イェーガー（1886～1961）の著書『パイデイア―ギリシア的人間の人格形成―』（*PAIDEIA　DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*）のG. ハイエットによる英訳版『パイデイア―ギリシア的教養の理念―』（*Paideia:The Ideals of Greek Culture*）から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究（８）（都留文科大学研究紀要第86集、2017年10月）に直接連続する。具体的には、『パイデイア』第Ⅲ巻（第４編）の「１Greek Medicine as Paideia パイデイアーとしてのギリシアの医術」の後段を対象とする。

２．小論の構成について

小論では、小論としての独自の節を設定して訳出し、その節ごとに、＜注記と考察＞として私の注記的なものと簡略な考察事項とを付す。訳文の節の区切りは私の判断によるもので、その節名も私が便宜的に付したものである。なお一つの章内の節番号に連続性をもたせるために、「本継続研究（６）」の節番号の１．～４．を７．～10．に改め、この拙論の節番号は「本継続研究（８）」の13．の継続とし、13節の途中から15節までとする。

「NOTES」（「ANMERKUNGEN」）は、≪原文注記≫としてⅡ．の末尾に記す。そのあとに、本章の＜全体の考察＞を置く。

なお「Ⅲ．現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解」は、本継続研究の一環としての考察ノートである。

３．テキストと論述の仕方

イ）テキストは第Ⅲ巻（1944年版）を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは1944年版のものである。なお和訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一巻にまとめられた復刻版（1989年、初版は1973年）を用いている。

なお、英訳に際し複数解釈の可能性が生じる場合など、著者イェーガーと訳者ハイエットは、かなり頻繁に協議したものと推測される（本継続研究（３）を参照のこと）。そして、ときに、ドイツ語版（ないしドイツ語原稿）にはない、より詳しい（あるいは具体性をもつ）説明が加わることもある。そうした事情を含め、英訳版はドイツ語版（ドイツ語原稿）のきわめて正確な訳となっており、ドイツ語版はもちろん、英訳版もイェーガーの原著と受け止めてよいものとなっている。

ロ）キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し（格変化などは原文中のまま扱った）、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。文章中の参照事項の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

ハ）カッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ）＜注記と考察＞における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究（５）と同様である。

Ⅱ.「パイデイアーとしてのギリシアの医術」（英訳版第４編の１Greek Medicine as Paideia）

パイデイアーとしてのギリシアの医術（その４）

英訳版第Ⅲ巻、1944年版：36p～45p

13. 医学と哲学の新たな統合とパイデイアー概念の深化――「食餌法について」の執筆年代はアカデーメイアとイソクラテースの時代と推定される

（「本継続研究（８）」からの継続）

＜訳文＞36p～40p

チーズについての短い章だけでも、著者が、小論「古来の医術について」で性急な一般化ゆえに厳しく批判されているその人物だとする、一般的な見解を否認するのに十分である。その小論（＝「古来の医術について」）は現に、その批判が正しいことを証明するためにチーズの例を引き、一般化にふけっている医者はすべてのチーズは健康に悪いと断言する、と言っている。この著（＝「食餌法について」）の著者は、他方、（きわめて適切にも）チーズは重いと言うけれども、しかしそれは栄養があるとも付け加えている。≪86≫二冊の本の受け入れられている年代決定（the accepted dating, Zeitverhältnis 時代関係）はしたがって逆転されるべきであり、というのはこの食餌療法学者は「古来の医術について」だけではなく、他の古いヒッポクラテースの諸著作を読んで使っているのは明かであるから。たとえば彼は、小論「空気、水、場所について」の導入部で医学的見地から重要であるとして列挙されている、気候上の諸要素の一覧を（ほとんど：beinahe）逐語的に借用し、≪87≫それから彼は、運動（exercise, Übungen）はこれらの諸要素に応じて決定されるべきだと主張する。その上われわれは、彼が *Visits*（「異国の諸都市への訪問」＝「流行病」）で表明されている見地を知っていて、しかも（逆に：umgekehrt）コース（koische）学派は彼の著作をもっていた、ということを否定できない。「異国の諸都市への訪問」（＝「流行病」）

においては、（われわれが見てきたように）思考（thought, das Denken）は‘魂の戸外への散歩である（soul’ s walk abroad, Spaziergang der Seele)’≪88≫と見事に言われている。[1] この著者（＝「食餌法について」の著者）はその考えを取り上げ（それがどのような出典からのものであれ）、そうして自分のやり方でそれを体系的に活用した：というのは、彼は思考だけではなく諸感覚や話すことの活動も‘運動（exercise, Übungen)’として分類しているのである。 それらはしかしながら、‘自然な（natural, naturgemäßen)’ 努力（exsertion, Anstrengungen）として、それら（＝思考と諸感覚や話すことの活動）を人為的ないし‘過激な（violent, gewaltsamen)’努力として分類される散歩や体育とは異なる種類とする、特別な部類に入れられている。≪89≫この理論と結びついた身体運動の理論は、まったくその著者自身の創作物のように響くのであり、というのは、彼は、魂が自らを働かせるときはそれ（＝魂）は暑くなり乾いてくるということ、また身体の湿気の消耗はそれ（＝身体）を痩せさせるのに役立つということ、を述べているのである。

われわれは、小論「食餌法について」はわれわれを（単に：nicht nur）（前）5世紀の外へ連れ出すというだけではなく、はるかに4世紀の中へ連れていく、と結論せずにはいられない。このことを証明するものはいろいろある：言語、文体、そして内容、など。その一つで十分だろう。（すなわち：nämlich）著者は、マッサージは、体を強く温めすぎないように（οὐ δεινῶς[2]）オリーブ油[3]と水を混ぜたものでなされていくことを勧める。≪90≫さてわれわれは、カリュストスのディオクレースによる、この問題についての専門的研究の一つの大きな断片をもっているのであって、それは彼の父である医師アルキダーモスの追想（the memory, Andenken）に捧げられたもので、その父の名をとって命名されている。アルキダーモスは一般に行なわれているオリーブ油を用いるマッサージを、それが体を過剰に熱くするので、使用禁止に（condemned, verworfen）していた。ディオクレースは、彼が与える理由を論駁し、折衷案を示唆する――つまり、夏はオリーブオイルと水を混ぜたものでの、冬は純粋なオリーブオイルでのマッサージ、というものである。≪91≫オリーブオイルと水によるマッサージの推奨とその必要を説く理由（体を熱することを避けるという）は非常に独特で（individual, individuell）あったので、ディオクレースと、論文「食餌法について」の著者との一致は、単なる偶然ではあり得ない。（当面のケースの場合：im vorliegenden Falle）どちらがその考えを生み出したかの論議をする必要はまったくない。私が、私のディオクレース（この教条主義的な医学派の有名な主唱者：diesem berühmten Vertreter der dogmatischen Ärzteschule）についての著書で証明したように、彼は（前）300年を超えてまだ生きていたのであり、そのころになって彼の経歴（career, Blüte 全盛期）は頂点に達したのである。≪92≫われわれは、「食餌法について」をそんなに遅くに設定することはできない。他のことはさておき、そこには、ディオクレースの著作をとおして顕著である、アリストテレースとペリパトス学派の影響のなんの痕跡もない。[4]それゆえ、その著者（＝「食餌法についての」の著者）は、ディオクレースの父（アルキダーモス：Archidamos） によるオリーブ油のマッサージについての（完全な：völlige） 拒否（condemnation, Verwerfung）を知っていて、それを誇張だとみなした（誇張だとして受け入れなかった：als Überteibung abgelehnt hat)。彼は、体を熱くし過ぎないように、オリーブ油と水を混合して使うマッサージに関しては妥協した。[5]ディオクレースは夏季に対してはこの妥協（compromise, Kompromißvorschlag 妥協提案）を受け入れ、冬季に対

しては純粋なオリーブ油を用いるマッサージを堅持した（kept, beharrt 固持した）。彼（＝ディオクレース）が（傑出した食餌法の専門家として、やはり以前に明らかに：als hervorragender Diätspezialist auch sonst offenbar）「食餌法について」を読んでいてそれを利用したということを信じる別の理由もある。もしこの論議が適切と見なされるならば、著作は、ディオクレースの父アルキダーモスと同時代の人によって書かれたのであった。その著書のつよい折衷的な性質、その長さ、それが引いている他の著作の膨大な数、≪92a≫はまたそれをあの時代に設定するのに役立つ。

その著者を４世紀に置くことを助ける別の視点もある。それは、彼の、資料を体系的な種類と部類（types and classes, Gattungen und Arten 部類と種類）に区分する、際立った傾向であり、というのは、その方法は４世紀に盛んになった（flourished, in voller Blüte stand 隆盛をきわめた）のである。（確かに：zwar）５世紀においてさえ、医術的試みの全分野で種類（types, Typen）（εἴδη[(6)]）を苦心して作り出す傾向を認めたのは事実である；しかし、ここでは、あの動向は、はるかに先の段階に達していたのである。そのことは、著者がその可能なかぎり多様な食べ物の詳細な叙述の基礎とする、動－植物界の見事に体系づけられた配列にとくに明瞭である。何年も前に、彼の動物体系（Tiersystem, zoology 動物学）はある動物学の専門家の注意を引いたのであるが、≪93≫その人は、一人の医者が、単に食餌的な目的のために、非常に複雑で、アリストテレースにぴったりと類似するするような体系を精巧に作り上げ得たということを信じるのはむつかしいと感じた。それは、余りにも苦心を要するほどに詳細に、また余りにも完全に動物学理論への関心に心が占められているように、見えた。他方、われわれは、（前）５世紀に、つまりアリストテレース以前に、動物学が一つの独立した科学として扱われているということを聞くことはないのであり；しかもその時期が、あの小論の正しい年代と思われていた。このジレンマにおいて、学者たちは、ヒッポクラテース学派は医学目的のために包括的な（comprehensive, eingehend 詳細な）研究をしたのに違いないと結論し（古代の著者はだれもそうだとは言っていないけれども）、「食餌法について」の著書から、彼らはある種の‘コース学派の動物学的体系’というものを再現した。しかし、そのような形においてさえ、（前）５世紀にアリストテレースのものに非常によく似た体系的な動物学理論がほんとうに存在したということを信じるのは不可能である。≪94≫われわれは、もしわれわれがそれをプラトーンの時代に設定すれば、著作の体系（structure,）によって引き起こされる、その謎をよく理解することができる。同じ時代に書かれた喜劇俳優 Epicrates（Epikrates）による有名な一節があるが、それは、全ての動－植物界を分類しようとするアカデミーでなされた試みのことを語っているが、一人のシケリアーの医者がそれに参加した（took part in, zugegen war 居合わせた）ということを話している。≪95≫なるほど（その際：dabei）この訪問者が退屈し、それを無作法に見せたことは本当である；だがしかし、まさに彼が居合わせているという事実こそが、こうした研究がかなり遠方からきた医術の訪問者たちを、彼らは彼らのなかで明らかにされている経験主義の欠如によって失望させられたかもしれないが、惹きつけたということを示しているのである。非常に異なった種類の精神の持ち主が遠い国々よりプラトーンの学園に惹きつけられたのであり、疑いもなくこのシケリアーの医者もそのような数多の視察する科学者たちの一人にすぎなかった。≪95a≫この主題（this subject, die Einteilung des Tier-und Pflanzenreichs 動植物界の分類）のアカデーメ

イア[7]によってなされたいくつかは、後にスペウシッポス[8]によって発表され、またアリストテレースによって使われた。小論「食餌法について」の動物学体系は、その双方の研究との類似性を示している。≪96≫それでも、それの（＝「食餌法について」の）、スペウシッポスとアリストテレースとの関係について最終的な判断を下す前に、それの植物分類とそれの他の種類（types, Gebieten 分野）への接近法（method of approach, Einteilungsmethode 区分法）を分析した方がより無難だろう。ここでわれわれのできることはただ、一般的に、その著者が属した知的な環境の種類を叙述することだけである。われわれは、彼がプラトーンの動物や植物を分類しようとする試みよりも後でなければならない、と決めてかかる必要はない。プラトーンは自ら、自身の弁証法的な分類方法（his dialectic system of classification, seine dialektische Methode der Einteilung）の詳細な説明の個所で（*Phaedrus* 265f.）[9]、それ（＝自身の弁証的な分類法）はヒッポクラテースの方法が手本にされるべきだと述べている。≪97≫たしかに、彼（＝プラトーン）は（そこで：dort）かつてあの方法が人間以外の有機体に適用されたとは言っていないが、しかしプラトーンの時代までに医学学派がそれを植物や動物にも拡張していたこと、また（それゆえに：daher）哲学者たちと医者たちがあの探究法に共通の関心をもったこと、は考えにくいことではない。

一つの注目すべきことであるが、小論「食餌法について」は、ヒッポクラテース全集の他のどんな著作よりもはるかに頻繁に ‘soul, Seele 魂’ ということばを使っている。それを他の著作に見出すことは、むしろ例外的なことである。≪98≫このことは偶然ではあり得ない。その著者がそれ（＝魂ということば）を自分が持っているヘーラクレイトス哲学の（Heraclitean, heraklitisierenden）資料から写し取ったと言って説明することでは十分ではないのであって、[10]というのは、彼が魂のことを、自然哲学を扱っている文章（第一巻：Buch 1）だけではなく[11]食餌法に関する文章でも話し、そのうえ第四巻の全体を、夢に現われる身体過程の魂への反映に費やしているからである。彼のいろいろな種類の夢の中の像（dream-pictures, Traumbildern）の詭弁的な（casuistical, kasuistischen こじつけの）解釈は、インド人やバビロニア人の、彼の著作より以前や以降の夢占いの書、に共通するものを多くもっている。学者たちはこの点で、少なくともギリシア医学は直接的にオリエントの影響を見せていると結論してきた。≪98a≫このこと（＝オリエントの影響）は、ずっと古い時代においては十分にあり得えたことだろう；しかしそれ（＝「食餌法について」）は 4 世紀にもっともぴったりするのであり、というのは、イオーニアーの医師クテーシアース[12]とクニドスのエウドクソス[13]がオリエントの似通った個人的知識を獲得し、エウドクソスがそのうちのいくつかをプラトーンのアカデーメイアに伝えたのは、そのときであった。≪99≫ギリシア人は実際には、自分たちの思想自体が ‘精神 soul’ に集中するようになる前は、魂の夢見（dream-life, das Traumleben）について、東洋の知恵も迷信も受け止める準備ができていなかった――そしてそのこと（＝ギリシア人の思想自体が精神に集中するようになること）は、この独特の科学的で理論的な形式においては、4 世紀までは起きなかった。その上、こうした新しい考えにもっとも感銘深い表現を与えたのは、アカデーメイアであった。プラトーンの魂に関する学説は、アカデーメイアが魂の夢見への哲学的関心とその実際の意味を引出す、源であった。≪100≫若いころのアリストテレースは、いくつかの対話篇で、その問題を論じた。「食餌法について」を執筆した人物は、彼の考

えはきわめて個性的ではあったが、夢の問題の論述において、アカデーメイアによってなされた研究に影響を受けたのはもっともなことである。

アリストテレースは、その対話篇におけるように、魂は身体が眠っているときにもっとも自由であるというオルフェウス教の概念から始めるのであり、というのはその場合には魂は落ち着いており、完全であり、まったく（それ自体で：selbst）独立しているのである。≪100a≫しかし彼（＝アリストテレース）はこの教理に、固有の医学的な転回（twist, Wendung）を与える：彼は、眠っている間は、魂は、外部的な影響に惑わされることなく、その所有者の身体的な状態をもっとも明瞭に映しだす、と述べる。アリストテレースの著作 *On the interpretation of dreams*（, Über Traumweissagung‘「夢占いについて」）（今も現存している[14]）は、夢の意味が４世紀に科学的に論議されたということを示している。彼は（同様に：gleichfalls）、夢は現実生活の経験（と感情：Empfindens）の作用であるということを、だからといってそれら（＝夢）が本当に未来を予言するとは信じず、認めている。　同じように、「食餌法について」　の著者も夢占い（oneiromancy, die Traummantik）を直接的に受け入れてはいないのである：彼は、それを予言（prophecy, Prophetischen）から兆候（prognostication, Prognostische ）に変えようとしている。ただし彼は元の手本のあとを追いすぎ、そして迷信に道を譲ることで終わっている。

著作（＝「食餌法について」）の言語は、４世紀中期の方を、その初頭や初期のどの時期のものよりも、連想させる。イオーニアー方言は４世紀全体を通してまだ書かれており、これらの、対照法や均衡のとれた節をもつ、凝った、しばしば長ったらしい文章は、ゴルギアースの時代よりもイソクラテース的な修辞法の時代を示している。[15]それら（＝これらの文章＝「食餌法について」の文章）が、われわれが（当然の慎重さをもって）ヒッポクラテースや彼の直接の継承者の時代に帰す、まったく技巧的でも修辞的でもない専門医の論文と同じ時代に書かれたということは考えられない。また、より古い世代の、あまり専門的ではない、より一般向けの著作は、それらは詭弁的な手本の影響をよりつよく受けていたのであるが、この著作の散文体とはやはり大いに異なっている。その文体は、章から章へと非常に異なっている。大部分の学者は、その著者は単にかなりの異なった著作をコピー（copying, Abschreibens コピー、剽窃）していると言う。しかし、彼は望むならば非常に巧みに書くことができるのであり、それ（＝文体の多彩さ）はおそらく、まさに多才さ（versatility, Polyhonie ポリフォニー）の衒い（an affectation, affektierte）なのであろう：それは、導入部で彼が公言する総合という崇高な目標（the ideal of, inneren Haltung 内心の構え）に相応するようなものである。彼は、自分が多数の先輩たちの諸理論を結合しようとしているので、自分はおそらく独創性の欠如ゆえに軽蔑されるであろう、と言う；しかしそのことを彼はまったく誇りに思っているように実際には見える。[16]≪101≫これは、われわれがイソクラテースに初めて出会う考え方であり（彼においては、それは内容よりもむしろ形式に関係しているのであるが）――‘様式の混合（mixture of styles, Mischung der Formarten）’は最高の文筆技術ということであり、そして総合はその著者の目的なのである。結局、この著の著者は、イソクラテースのように、自分の独創性に対する世評を非常に気にしているのである；そしてそんな心配もまた４世紀の特徴を示しているのである。

＜注記と考察＞

(1) イェーガーのここの論述では、「異国の諸都市への訪問」（=「流行病」）と「食餌法について」の関連性が意識されており、すでに本継続研究（8）の≪原文注記≫73. で述べられている。それぞれの該当箇所の引用は、その原文注記における＜注記と考察＞(25)（26）を参照のこと。

(2) δεινός：驚くほど強い、激しい、強烈な。

(3)「オリーブ油」は oil（Öl）の訳で、ギリシア語原文では ἔλαιον（オリーブ油）となっている。当然、原文注記の＜注記と考察＞（4→73）で引いた文章も「オリーブ油」となっている（『ヒポクラテス全集　第2巻』）。

(4) アリストテレース：前384年～前322年3月7日。ギリシアの哲学者、科学者で、「万学の父」と称えられる百科全書的な大学者とされる。父はマケドニアー王の侍医であったといわれ、「17歳の頃アテーナイに赴きプラトーンのアカデーメイア学園に入門、プラトーンの死まで約20年間そこに留まった（前367～前347）。」という。また、マケドニアー王ピリッポス2世の招聘を受けて「13歳の王子アレクサンドロス3世（後の大王）の師傅を務めた」のが前342年～前339年のことになる。さらに、「前335年には再びアテーナイに戻り、市の東北部のアポッローン神域に自らの学園リュケイオンを開設。遊歩場 peripatos（列柱を備えた屋根つきの回廊）を散策しながら教えたので、彼の学派はペリパトス学派 Peripatetikoi（逍遥学派）と呼ばれるようになった。大王の協力も得て、彼はこの学園に手写本や各種標本の類を蒐集、後のアレクサンドレイアのムーセイオンのモデルともいえる博物館、学術図書館を設け、大勢の弟子とともに研究と教授の日を送った。妻ビューティアスの死後は、奴隷出身のヘルピュッリス Herpyllis と同棲し、彼女によって息子ニーコマスを儲けた」という。（松原著）なおアリストテレースのプラトーンとの関係について、松原は、「…確かに彼の研究は観察と経験とを重んずる実証主義的傾向が強く、プラトーン学派の教説と対立する面を持ってはいるが、その思想の根底に最後までプラトーン哲学の決定的影響があることは否めない。」と述べている。

(5) 原文注記の＜注記と考察＞（4→73）で引いた、「食餌法について」2.65の末尾の、「オリーブ油に水を混ぜて塗ってマッサージするのは、体を柔らかくし、体が極端に熱くなるのを防いでくれる。」を指しているのであろう。つまり「食餌法について」の著者は、純粋なオリーブ油によるマッサージが体を極端に熱くするという性質を認めながら、オリーブ油を効果的に使う妥協の提案をしている。

(6) εἶδος：形、形相、理念、イデア、種類、本性、見ること。これらの意味はギリシア思想ではすべて本質的関連をもっているが、ここでは「種類」「種」という意味で使われている。

(7) アカデーメイア：もともとは、「アテーナイの西北1マイルほどの郊外にあった英雄アカデーモスの聖地」であり、「ケーピーッソス河畔のオリーヴの聖林で、女神アテーナーやエロース神の祭壇、ギュムナシオン（体育場）などが設けられていた。ヒッパルコスによって周壁が築かれ（前6世紀後期）、次いでキモーンによって競走場や散歩道が整備されて（前460年代）、アテーナイ市民の遊楽の地となった。前387年頃、哲学者プラトーンがこの地の庭園に学校を開き、その後40年間にわたり教育と研究に

専念。以来アカデーメイアはプラトーンの学園の名として世に知られるようになる。」とされる。そのアカデーメイアでは「学頭と学生とは１つの生活共同体で結ばれ、授業料はなく、男装して学んだというアクシオテアーAksiotheaら女性の入門も認められていた。」という。プラトーンの死（前347年）後は、「スペウシッポス、次いでクセノクラテース、ポレモーン、クラテースらが学頭となり、プラトーンの説を継承しつつ、ピュータゴラース学派の数学的思弁と結んだ形而上学説を体系化した（古アカデーメイア派）。」という。その後、懐疑的哲学を指導理論とし、ストアー学派との間に論議をたたかわせるなど、変遷をたどる。さらに、「ローマ帝政期に入ってからも、アカデーメイア学園の伝統は存続し、プラトーンおよびアリストテレースの注釈面で貢献、とりわけ後５世紀の学頭プロクロスの頃には、新プラトーン主義哲学の中心地として注目された。しかるに、次第にキリスト教徒の圧迫を受けるようになり、ついに529年、東ローマ帝国皇帝ユースティーニアーヌス１世（大帝）の勅令で、「異教思想」として活動を禁じられ、リュケイオン等他の哲学校とともに閉鎖を余儀なくされ、九百余年に及ぶその歴史を終えた。なお、歴代学頭、とりわけ初期の人々は、単なる師弟関係にあったのみならず、ギリシア世界通有の相思相愛の恋愛関係によって結ばれていたことで知られる。」という。（松原著）

なお、古代ギリシアにおける諸学園や学派の創設については、本継続研究（４）のⅡ．６．の＜注記と考察＞（２）を参照のこと。

(8) スペウシッポス：前407年頃～前339年。ギリシアの哲学者でアテーナイの人。「プラトーンの甥で、アカデーメイア学園の後継者。初めイソクラテースに師事し、のちプラトーンのアカデーメイア創設に加わる。プラトーンの第３回シケリアー（現・シチリア）渡航（前361）に同行し、次いでディオーンによるシュラークーサイ市の政権奪取計画を支援した。」という。彼は「数学や自然科学にも関心を向けたらしく、彼の試みた生物の分類方法は、アリストテレースの動物学に影響を与えたと見なされている。師プラトーンのイデアー論を否定し、ピュータゴラース学派に倣って「数」を重んじたともいう。」とされる。（松原著）

(9)『パイドロス』の265では、「話したり考えたりする力」としての「分割と総合という方法」がイメージゆたかに語られていく。その趣旨に該当する部分だけを（脈絡を略して「」内を一続きとし）下記に引いておく（藤沢令夫訳、岩波文庫）。

「**ソクラテス**　しかるに、狂気には二つの種類があって、その一つは、人間的な病いによって生じるもの、もう一方は、神に憑かれて、規則にはまった慣習的な事柄をすっかり変えてしまうことによって生じるものであった。

パイドロス　たしかに。

ソクラテス　そしてぼくたちは、この神がかりによる狂気を、四人の神々がつかさどる四通りのものに区分した。すなわち、予言の霊感はアポロンが、秘儀の霊感はディオニュソスが、他方また詩的霊感はムゥサの神々が、第四番目のそれはアプロディテとエロースとがつかさどるものとしたうえで、そのなかでも恋の狂気こそ最もよきものであると主張した。…」

「**ソクラテス**　…そこでは二つの種類の手続きがふまれているのであって、もし誰かが、その二つの手続きがもっている機能をちゃんとした技術のかたちで把握

することができたら、おもしろいだろうと思うのだ。

パイドロス　それはいったいどのようなものですか。

ソクラテス　そのひとつは、多数にちらばっているものを綜観して、これをただ一つの本質的な相へとまとめること。これは、ひとがそれぞれの場合に教えようと思うものを、ひとつひとつ定義して、そのものを明白にするのに役立つ。たとえば、さっきぼくたちは、エロースについて語るのに、まずエロースとはなんであるかを定義したのであるが、あのエロースについての話がうまかったかまずかったかは別として、少なくとも、この手続きのおかげで、あの話は明確で首尾一貫したことを語ることができたのだ。

パイドロス　では、もうひとつの種類の手続きとは、どのようなものを言われるのですかソクラテス。

ソクラテス　いまの行き方とは逆に、さまざまの種類に分割することができるということ。すなわち、自然本来の分節に従って切り分ける能力をもち、…」

「**ソクラテス**　このぼくはね、パイドロス、話したり考えたりする力を得るために、この分割と綜合という方法を、ぼく自身が恋人のように大切にしているばかりでなく、また誰かほかの人が、ものごとをその自然本来の性格に従って、これを一つになる方向へ眺めるとともに、また多に分かれるところまで見るだけの能力をもっていると思ったならば、ぼくはその人のあとを追うのだ、「神のみあとを慕うごとく、その足跡をたどりつつ」ね。…」

(10)「食餌法について」第四巻の１（86）は、やや長い引用になるが、下記のとおりである（『ヒポクラテス全集　第２巻』）。

「睡眠中に現われるしるしについて正しく認識した者は、そのしるしがあらゆる物事に対して大きな威力をもっていることに気づくであろう。魂は、体がめざめているときには体に従属し、多くの部分に分かれ、自立しているのではなくその一部分を体の各部位の働き――聴覚・視覚・触覚・歩行・全身運動――に割り当てている。そのとき思考は自立していない。しかし体が休息すると、魂はめざめて運動し、自分本来の場所に居をすえ、体のあらゆる活動を魂自身が行なう。実際、睡眠中は体には感覚がないが、魂はめざめていて、あらゆる事物を認識し、見えるものを見、聞こえるものを聞き、歩き、触れ、苦しみ、思案する。要するに、体あるいは魂が役割とする働きなら何であれ、睡眠中にはすべて魂が行なうのである。したがってそれらのしるしを正しく判断するすべを知っている人は、知恵の大切な部分を知っていることになる。」

なお第四巻の内容について、訳者の概説文はイェーガーの論述を理解する上で参考になるので、下記に引いておく。

「…さて、この『食餌法について』第四巻は、古くからむしろ『夢について』という表題で知られている。著者は、夢は魂の活動状況を反映しているから夢の内容を解釈すれば健康状態が把握できるとし、夢の内容ごとに、食餌や運動の面で注意すべき事柄を挙げている。解釈される夢は、自分の姿や行動に関するもの、風や雨などの気象現象に関するものなど、さまざまに及ぶが、天体（太陽・星・月）の運行についての夢が詳しく扱われている点は、本篇第一巻で繰り返し強調

されているマクロコスモスとしての宇宙とミクロコスモスとしての人体との対応を重ねて示唆するものとして、とくに注目に値する。」

ところで、イェーガーが指摘する、「食餌法について」における「魂」への言及は、「夢」を扱う第四巻に多いが、そのほか第ニ巻（61, 64）でも繰り返し言及されている。

なおイェーガーのヘーラクレイトスへの言及であるが、該当すると判断される「断片」はいろいろ考えられる。参考のためにその一つから抜粋して引いておく（『ソクラテス以前哲学者断片集　第１分冊』岩波書店、1996年）。

「**セクストス・エンペイリコス**

（126）そしてヘラクレイトスも、やはり真理の認識のために二つの器官つまり感覚と理性とを人が備えていると考えていたので、先に言及された自然哲学者らと同様に、それらの二つの器官のうち、感覚は信用できないものであり、それに対し理性の方は規準となるものと見なした。実際、感覚については、逐語的には次のようなことばで語り、これを非難している。つまり「目と耳は、その意を解せぬ…」。これはちょうど「非理性的な諸感覚に信頼を寄せるのは、ことばを解さぬ魂のすることだ」というのと同じことである。

（127）しかるに他方、理性については、これを真理の規準であると彼は言明している。だがしかし、それはどのようなものであろうとよいというのでなく、むしろ共通で神的な理性なのである。ではこの理性とは何なのか、これを簡潔に示さなければならない。この自然哲学者の見解は、すなわち、われわれを取り巻いているものが理性的で思慮のあるものだというものなのである。

（129）さて、ヘラクレイトスによると、われわれは、呼吸を通じてこの神的な理性を吸い込むことにより知的となり、そして、眠りの内にあるときは忘却しているが、覚醒しているときにはふたたび知的となる。なぜそうかと言えば、眠っている間は、感覚の通路が閉じて、われわれの中の思惟が、周囲を取り巻いているものとの自然的接合から切り離されてしまい、ただ呼吸による接続だけが、あたかも何か根のように保持されているのであり、そして、こうして切り離されることで、思惟は、前に持っていた記憶の力を失うのである。しかし、思惟は、ふたたび目覚めると、ちょうど何らかの窓から頭を覗かせて外を見るように、感覚の通路を通じて外へと伸び出てきて、周囲を取り巻くものと結びつき、理性の力を身につけるのである。こういう訳で…」

なお、ヘラクレイトスの「著作断片」の訳者（内山勝利）は、「（ヘラクレイトスの思想として名高い「万物流転（パンタ・レイ）」というキャッチ・フレーズは、これらの断片がもとになって後代に生まれたもので、この句は彼自身の断片には見当たらない。またそれは、内容的にも、必ずしもヘラクレイトスの中心思想をなすものではなかった。――訳者付記）と説明している。

さて、ヘーラクレイトスについては、イェーガーはすでに≪原文注記≫63.（本継続研究（８））で注目している（その原文注記における＜注記と考察＞17も参照のこと）。さらに、イェーガーの、ヘーラクレイトス派のクラテュロスがプラトーンに与えた影響についての論述は、本継続研究（７）のⅡ．２．「プラトーンの学説とソークラテースとの関係についてのアリストテレースの観方、およびその後世への影響」

を参照のこと。

(11)「食餌法について」第一巻の日本語訳（『ヒポクラテス全集　第2巻』）ではΨῦχή を、それが「魂、霊魂」だけではなく「精液」「精子」「受精」という意味合いでも使われているので「精」とし、第二巻以降を「魂」とした、と注記されている。

(12)クテーシアース：前5世紀後半～前4世紀初期。クニドス出身のギリシア人史家で、「医師の家系アスクレーピアダイ Asklepiadai 家に生まれる。アカイメネース朝ペルシアに捕われたが（前416頃）、医術に長じていたため、ダーレイオス2世、アルタクセルクセース2世に重用され、17年間にわたり宮廷医として仕えた。」とされる。無事に祖国に帰りつき（前398）、「『ペルシア史 Persika』23巻、『インド史 Indika』『地誌 Periodos』3巻などの作品をイオーニアー方言で書いたが、いずれも散逸し、断片でした伝わらない。」という。（松原著）なお、イェーガーのクテーシアースの叙述は、英訳版で挿入された。

(13)エウドクソス：前408年頃～前355年頃〈前391年頃～前338年頃など異説あり〉。クニドス出身の数学者・天文学者・哲学者で、「科学的天文学の創始者」とされる。「ピュータゴラース派のアルキュータースやプラトーン、ピリスティオーンに学ぶ。たいそう貧しかったので、医者のテオメドーン Theomedon の愛人となって生活の面倒をみてもらい、その供をしながらアテーナイへ渡ったという（23歳）。次いで友人たちの援助でエジプトへ旅し、ネクタネボス1世の宮廷に滞在、同地の神官たちから天文学や暦法の知識を修得した（前381～前380）。その後、カーリアーのマウソーロス王の宮廷をはじめ小アジア各地で活躍、キュージコスで数学の講義をし、40歳の頃に生徒とともにアテーナイへ移って科学と哲学の学校を開いた。」という。また「天体観測を行ない占星術を否定、地球中心の同心天球説を唱えて、未解決だった留や逆行など惑星運動の不規則性を説明し、また球体幾何学を創始した。数学では、球やピラミッド、円錐体の体積を「積尽法」で測定し、さらに比の概念を明らかにして、一般比例論をつくりあげるなど、エウクレイデース（ユークリッド）の『幾何学原論』第5巻にある定理のほとんどを発見した。」という。また「哲学の分野では、「快楽が善である」と主張したといわれ、医学や地理学にも通じていたが著作は散逸した。」とされる。（松原著）

(14)アリストテレース「夢占いについて」は『自然学小論集』とされるもののなかに収められている（そこには「感覚と感覚されるものについて」「記憶と想起について」「睡眠と覚醒について」「夢について」、など8編が収められている）。参考のために、「夢占いについて」の一部を下に引いておく（『アリストテレス全集　6』岩波書店、1968年）。

> 「…とにかく医者のうちの精鋭な者もまた、ひとは熱心に夢に注意を払わねばならないと言っている。してこのような見解を持することは、実際の医者ではないにしても、また何かを探究するところの愛智者〔すなわち哲学者〕にとっても理のあることなのである。なぜなら昼間起こる〔身体内の〕運動は、もしそれが甚だ大かつ強でなければ、醒めている時の一層大きい運動に並べられると、気付かれないからである。だが眠っている時にはその反対である。というのは〔眠っている時には〕小さい運動でさえも、大きくあるように思われるからである。」

(15) ゴルギアースは前485頃～前380年頃で、イソクラテースは前436年～前338年。

ゴルギアースはギリシアのソフィスト、弁論術の大家。本継続研究（６）のⅡ．３．＜注記と考察＞（２）を参照のこと。

イソクラテースはアテーナイの修辞学者・政治評論家で、「アッティケー（アッティカ）の十大雄弁家の一人」で、「優れた弁論術教師で、デーモステネースと並ぶアッティケー弁論家の巨匠」であったとされる。彼は「ゴルギアースやプロディコスらソフィストに学んだのち、ペロポンネーソス戦争（前434～前404）で財産を失ったため、職業的な法廷弁論代作者 logographos となり、前392年頃、アテーナイに修辞学の学校を設立。100人を下らぬ門弟を有料で教育し、たちまちにして名声と富を得た。博い教養をもって弁論術を教え、プラトーンら哲学者の学園に対抗、イーサイオスやリュクールゴス、ヒュペレイデース、アイスキネース等々優れた子弟を半世紀余りにわたって送り出した。自身は病弱で声が小さく内気な性質だったので、読むための演説を研究・執筆し、ギリシア散文の文体を完成させた。」という。また「彼の著作は『祭典演説 Panegyrikos』（前380）、『パンアテーナイ祭演説 Panathenaikos』（前339完成）の２大作をはじめとする全21篇の演説、および９通の書簡が伝存し、おそらく公表された全作品が残ったものと思われる（異説あり）。その文体は、変化に乏しいものの、大河のごとく豊かに悠々と流れ、以後の散文の模範とされ、後世へ及ぼした影響は甚大。ローマの雄弁家キケローも、イソクラテースの教養主義的教育論から少なからず感化を蒙っている。」という。（松原著）

(16) そこでいわれている「導入部」を理解するために「食餌法について」1.1を確認しておくと、下記のとおりである（『ヒポクラテス全集』第２巻）。ここでイェーガーは、この著者の、その非凡さと、食餌法論の総合化という探究意思のことを述べようとしているのであろう。

「人間が健康を維持していくための食餌法についてこれまでに書き記してきた人たちのうちに、人知が及ぶかぎりのあらゆる事柄を正しく知っていて、それらをひとつ残らず書き記したように見受けられる人がいたならば、私は、その人が努力してくれたおかげで自分自身が正しい事柄を知ったことになるわけだから、役立つと思えるようにそれらの個々の事柄を利用しさえすれば、それでもう十分なはずである。しかし実際は、これまでに多くの人々が摂生法について書き記してきたが、誰も、どう書き記せば正しくなるのかわかってはいないのである。確かに人それぞれ、正しいことを書き記した部分もある。しかし、全体にわたってうまくいった先達はひとりもいない。もっとも、誰にもわからなかったからといって彼らを非難するにはあたらない。それどころか、彼らはみな、とにかく探求しようと努力したのだから、賞讃に値するわけである。私は、正しくない説に対してことさらそれを批判するつもりはない。一方、すばらしい知見はこれを受け入れることにしている。なにしろ先達が唱えた正しい説については、私がそれとは別のことをどう書いてみたところで、正しいことを書き記すことにはならないからである。また、正しくない説については、それが正しくないと批判するだけでは、私には何も得るところはないからである。個々の事柄を私がどの程度まで正しいと思うかを説明してこそ、私は、自分の意図することをはっきりさせる

ことができるであろう。私が以上のことを前もって述べておくのはつぎの理由からである。多くの人は、先達がある問題について説明するのを聞くと、その問題をそれ以後に論じる人々が言うことには耳を傾けようとしない。彼らには、正しい説を知ることが、一度も語られたことのない事柄を初めて知ることと同じ知的活動であるということがわかっていないのである。私は、さきほど述べたように、正しい説に対してはそれを受け入れることにする。しかし正しくない説については、それがどういう説であるかをはっきりさせることにする。また、先達が誰もはっきりさせようとしてこなかった事柄についても、それがどういうことであるかを説明することにする。」

14. アリストテレース学派の哲学を摂取している医者ディオクレースの食餌法の理論
＜訳文＞40p～44p

別の著名な医者は、通常、4 世紀の（初頭ないし：dem Anfang und）前半に位置付けられる：つまり、エウボイアのカリュストス出身のディオクレースのことであり、彼はアテーナイで働いたのであり、その基本的な考え方はヒッポクラテースとシケリアーとの双方の医学派のものにきわめて近い。≪102≫他の諸著作のなかで、彼は食餌法について有名な一つを書いた；その大きな断片が、皇帝ユーリアーヌスの侍医オリーバシオス（オレイバシオス）(1) によって編纂された（学術的：gelehrten）医術論集のなかに保存されている。しかしながら、近年、これらの断片の文体がイソクラテース派の訓練の洗練を示していること、また 4 世紀の初頭よりも後期を示す多くの特徴をもつこと、が指摘されてきている。この推測は確かに疑念を持たれてきたのであるが、≪103≫しかし他の諸考察はそれをまったく確かなものとする。ディオクレースはアリストテレースとは若い同時代の人であった。彼は、彼（＝アリストテレース）の門下生であったのであり、ペリパトス学派のテオプラストス(2)やストラトーン(3)の世代に属する；彼らは彼（＝ディオクレース）と共に研究し、彼の人生と仕事に対し第一級の現存する（extant, in der griechischen Literatur finden ギリシアの文献に見出す）証言を提供している。≪104≫彼の文体は、「食餌法について」を書いたヒッポクラテース学派の科学者と同様に、きわめて洗練されており（polished, sorgfältign gepflegt 入念にみがかられており）、また彼の著作は、それが専門的著作であるにもかかわらず、純然たる文学であることを熱望している――このことは、4 世紀における医学の知的地位と教育目的（the intellectual status and educational aims, die geistige Stellung 知的地位）にとって意義深い事実である（a significant fact, lehrreich 教えられるところが多い）。しかし、それ（＝彼の文体）は（特有の意味で：im spezifischen Sinne）修辞的ではなく、意図的に簡素である（simple, schlicht）。その点で、おそらく彼は（すでに：schon）、（ひとえに：einzig und allein）アリストテレースが導入して以降に広がった、科学的な文体についての新しい理想像の影響を受けている。

現存する最大の断片≪105≫において、ディオクレースは一日の日課（a day's routine, eines ganzen Tageslaufs 一日の全経過）を叙述することによって彼の食餌法の学説を詳述する。（だから：also）彼は、「健康時の摂生法について」の著者のように四つの季節に適した食餌を大まかに対照することを（in den großen abstrakten Gegensätzen 非常に抽象的な対照で）指示して生活の最善の方法を説明する、というようなことはしない。(5) それに

また彼は、「食餌法について」の著者のように飲食物と身体的鍛錬の徹底的な体系的記述（an exhaustive systematic description, erschöpfende Systematik 汲み尽くした体系づけ）を作り上げる、というようなこともしない。[(6)] そうではなく、彼は食餌法を人間の全生活を丸ごと包含しているものとして取り扱っている。彼の小さなドラマは一日で完結されることで時間のこの自然なまとまり（unity, Einheit）を得る；しかし彼はいつも、多様な年齢を識別するように、また季節の変化を顧慮するように気をつけている。（そのやり方は：indem）彼は夏の一日を詳細に扱うことで始め、それから冬や他の季節の一日の過ごし方の処方を付け加えるのである。それが、彼が企てたことをなす唯一可能な方法であった。

われわれは、（まずはじめに：zuerst）初期自然哲学がどのようにギリシア医術に影響したか、それから（次いで：dann）新しい経験主義的な医術が今度はどのようにプラトーンやアリストテレースの哲学に影響を与えたか、を見てきた。ディオクレースにおいては、彼は明かにアテーナイの偉大な哲学学派に影響を受けているが、医学はもう一度、それは見返りに何かを与えるには与えるのではあるが、それが与えたよりもより多くのものを受けとる。≪105a≫典型的な一日（a typical day, eines typischen Tageslaufs 典型的な一日の経過）を叙述するという方法によって適切な食餌法を説明することにおいて、彼は明かにプラトーンとアリストテレースの思考法を真似ている[(7)]——彼らはいつも人間の生活（human life, die menschliche Lebenshaltung）を *as a whole*（一つの全体として）考察し、正しい暮らし方の像（the ideal of right living, das Bild des richtigen Bios[(8)]）ですべての人間が従うべき規範（the standard, Norm）をつくるのである。なるほど、食餌法についての他の著者たちも規準（standards, den Normbegriff 規準の概念）を持ち出す；しかし彼らは単に、‘あれこれをしなければならない’と言うだけであり、さもなくば、ある種類の食べものの身体への影響を述べ、（この教示から：aus dieser Aufklärung）読者に、自分自身（＝読者自身）の実際的な結論を引出すことを任せる。ディオクレースは、その双方を回避する。その代わり、彼はどんなときでも（always, im einzelnen überall 詳細にどこでも）何が人間にふさわしく有益なのかを示す。４世紀には倫理も技術も、適切さという考え方（the idea of suitability, der Begriff des „Pssenden“）に支配されている。人間の生活（human life, menschlicher Lebenshaltung）は何かの規準によって（standard, normativen）調節され（regulated, Regulierung）なければならないのであり、それ（＝適切さという考え方）は、その時代の精神——個性を超える（over-individualized, überindividualisierten）が、それでもやはり繊細で趣味のよい（sensitive and tasteful, geschmackvollen 趣味のよい）——がもっともよく受け入れることのできるような規準であった。生活（life, Daseins）の全細部は、まるで洗練された（fine, feinen）、ほとんど感じとれないような網のなかのように、適切さという考え方（the idea of Suitable, dem Begriff des Passenden）に抱かれていた。*suitable*（適切）であるものとは、如才のなさ（tact, des Taktgefühls）によって、またあらゆる関連においてふさわしいもの（the appropriate, das Angemessene）を求める繊細な感受性によって、要求される振舞い（the behavior, tätigen Verhaltens 活発な振舞い）のことである。ディオクレースの食餌法の理論は、この考え方を身体生活に持ち込む。彼が、課業をつよく自覚させようとしている教師のように（durch die unablässige, eindringlich pädagogische Wiederholung 絶え間ない、食い入るような教育的な反復によって）、あらゆる新しい処方箋（prescription, Vorschrift

処方・指示）でどのように‘suitable’（„pssend“）（ἁρμόττον）[9]ということばを使っているかに気づかずにいることはできない。≪106≫また*proportion*（des richtigen Maßes）（σύμμετρον, μέτριον）[10]という考え方も非常にしばしば見出される。≪107≫そのように、ディオクレースはアリストテレース学派の倫理学に深く影響されている：そうして、他の見地からであるが、彼はアリストテレースの論理学（logic, der Analytik 分析論[11]）に依存している――彼は、医者たちがいつも、多くの一般的な現象は証明（proof, des Beweises）ないし派生（derivation, der Ableitung 誘導、演繹）の必要もなく単に存在するものとして受け入れられなければならないということを理解しないで状態（conditions）に対し一つの原因を見出そうとしている、ことを非難している。≪108≫論理的な精神は、あらゆる科学のなかでもっとも厳密である数学でさえ、 数と量は一定の固有性（property, Eigenschaften 属性・特性）[12]をもっていると（所与のものとして：als gegeben）仮定せざるを得ないという事実によって不安にさせられざるを得ない。アリストテレースは、これらの仮定によって提出される問題――数学で公理（axioms, Axiome）[13]と称するもの――の注意深い詳細な検討を行なった。 彼は、 哲学も個別諸科学も証明不能なある（certain）直接的な仮設（suppositions [14], Sätzen 公理・定理・命題）に基づいていると教えた。ディオクレースはこの考えを医学に導入したのであるが、その医学は、ヘレニズム時代に、経験論（empiricism）、独断論（dogmatism）、そして懐疑論（scepticism）のあいだの方法をめぐる大戦争の主戦場となる運命にあった。

彼は、自分の食餌法の説明を目覚めの瞬間で始めるが≪109≫、彼はそれを日の出のちょっと前に置くのであり、というのは、ギリシア人の全生活は一日の自然の経過に適合させられていたからである。主の食事は夕方にとられたのであるが、夏は日没の直前にであり、冬は当然にもっと後にであった。そのあと、虚弱な体質の人はただちに、強壮な人は短いゆっくりとした散策をしたあとすぐに、就寝すべきである、とディオクレースによって言われている。このとおりなので、早起きには何も妙なところはなく、実際にわれわれは他のギリシア人の証拠からそのこと（=《ギリシア人の》早起き）を知っている。ディオクレースは、われわれは目覚めてすぐに起床すべきではなく、眠りの重苦しさがわれわれの手足から去るまで待つべきであり、それからわれわれの首すじと頭部の、それらが枕を押し付けている箇所を摩擦するべきである、と言う。それから（腸を空にする[15]前でさえ）われわれは全身体を、体じゅうに少量のオイルを、夏は（多少の：etwas）水を混ぜて≪110≫、つけ軽く均等に摩擦して、さらに全関節を曲げるべきである。彼はこの（すぐ：sofort）後の入浴は勧めず、 手を洗い、 それから顔と目をきれいな冷たい水で洗う（bathed, bespülen und abwaschen すすいで洗う）ように勧告するだけである。それから彼は、歯、鼻、耳、髪、頭皮の手入れの仕方について詳細な指示をする。（頭皮は、と彼は言う、それが発汗できるように柔軟に清潔に保たれなければならない、がしかし鍛錬もされなければならない。）このあと、やらなければならない仕事のある者はだれでも、何かを食べ、それから自分の職務を始めるべきである。ひまな者は朝食（breakfast, dem Frühimbiß 朝早くの軽食）の前か後に散歩をすべき（soll…einschieben 割り込ませるべき）である――その者たちの体質や健康状態によって長い散歩、 あるいは短い散歩を（dessen Art und Daueru その方法と長さを）。歩きぶりは、もし朝食後になされるのであれば、長いものや早歩きのものであるべきではない。 それが終わると彼らは、 運動（exercise, die

Leibesübungen 身体の運動）の時間になるまで、座って家庭の用事を片づけるか、あるいは何か他のことに従事すべきである。それから、若者は体育館（gymnasium, Gymnasion）へ赴くべきであり、老人や病弱者はオイル（oil）を塗ってもらうように浴場、あるいはどこか他の日当たりのよい場所に行くべきである。なされる鍛錬の総量や難しさは、それをする人の年齢にふさわしいものであるべきである。かなりの年配者にとっては、ほどよくマッサージを受けること、少し動き回ること、それから入浴すること、で十分である。自分でマッサージすることは、誰か別の人にしてもらうよりも好ましいのであり、なぜなら自分自身の動きは体育（gymnastic exercise,die Gymnastik）の代わりになるからである。

朝の運動（exercise, die Körperpflege 体の手入れ）のあとに昼食がくるが、それは、それが午後の体育の前に消化され得るように、（適度に：recht）軽いものでお腹が張らない程度にすべきである。昼食の直後に、暗く涼しい、しかし隙間風の入らない場所での昼寝（siesta, Nachmittagsschlaf）がある；そうしてそれから、さらに別の（more, etwas）家庭の用事（business at home, häusliche Beschäftigung）や散歩を、そしておしまいに（もう一つの短い休息のあと）午後の運動（exercise, die Leibesübungen 身体の運動）がある。一日は夕食で終わる。ディオクレースは個々のトレーニング（exercise, Übungen）については何も言っていないのであり、食餌法についての全文献は、もし論文「食餌法について」の著者があれほどきちょうめんで（systematic）なかったならば、ギリシア人の体育（physical culture, Körperbildung）のこの重要な分野について何も伝えてくれないだろう――彼の全ての食べ物と飲み物の分類の後に、彼は可能なかぎりの種類の心身の激しい活動（exertions, Anstrengungen 労苦・骨折り）を列挙しており、その中に体育（gymnastic exercise, der gymnastischen Übungen）は含まれているのである。ディオクレースは、それら（＝体育 gymnastic exercises, die Gymnastik 体育・治療体操）を彼の養生法（regimen）から、いわば、切り抜き、しかもそれらを指導するトレーナー（the trainer, dem Gymnasten 体育教師・治療体操訓練士）に任せている。しかし彼の（医療上の：ärzlichen）一日の全計画は二つの固定点に基づいている：朝の運動（exercise, -gymnasions 体育）と午後の運動である。（まさに：gerade）　彼の（通常の日々の食餌法の：der normalen täglichen Diät）（いっそう：mehr）生き生きとした叙述は、どのようにギリシア人の全生活（それは他のどんな国民のものとも似てはいない）が彼らの体育（gymnastics, der Gymnastik）を中心にして回転しているかを十分に理解させる。彼の食餌法の理論は、まさに、体育（exercise, die gymnastische Betätigung 体育の活動）に使われるのではない、一日のあのすべての部分（all that part, den Rest 残り）を精確な医術的処方によって調整するという、またそれ（＝一日のあのすべての部分）をその人の体育の日課と完全に調和（harmony, Einklang）させるという、推奨（a recommendation, eine Anleitung 指導・手引き）と見なされてよい。

こういうことすべて（＝食餌法）の目的は、可能なかぎり最高の状態（diathesis, Diathese 素質・体質）[16]――一般的な健康にとっても、またあらゆる種類の身体の鍛錬にとっても、可能なかぎり永続する健康状態（condition）――に到達することである。ディオクレースはそう、何回か言っている。しかしもちろん彼は、世界が医術理論に適応するために運行されているのではない（er nicht in einer abstrakten medizinischen Welt lebt 彼は抽象的な医術の世界に生きているのではない）ということを理解しており、また彼は、

あたかも人は単に自分の健康を世話するために生きているかのように話しはしない。「食餌法について」の著者もまた、ある社会的困難さが存在していることを――医者の理想と現実の患者の生活の状態（conditions of the patient' s life, Lebensumständen des Patienten）との間には何がしかの妥協が見出されるべきであることを、（すでに：schon）はっきり知っている。彼はディオクレースと同じ結論に達している。彼（=「食餌法について」の著者）は、理想的な食餌法を、健康を保つこと以外にすることのない人のために作成し、それから、働かなければならない人たちや身体の面倒をみる時間がほとんどない人たちのことを斟酌する（makes allowances for, macht er Abstriche für 譲歩する）。≪111≫ 私たちは、ギリシアの医者たちが、金持ちのためだけに書いたと想像してはいけない。同時代の哲学者たちも同じことをしたのである――彼らは、まったく暇のある人によって暮らされるべき *bios*（生活）(17) というものを叙述し、それから諸個人に、この理想からそれぞれに引き下げる（deductions, Abstriche）のを任せた。

＜注記と考察＞

(1) オリーバシオス：後320/325年頃～403年頃。後期ローマ帝政時代のギリシア系医学教師で、「ユーリアーヌス帝の友人かつ侍医」となった。また、「主著はユーリアーヌスの要請に応えて編纂した膨大なギリシア・ローマ医学書からの抜粋集成『医学要覧 Iatrikai Synagogai,'Ιατρικαὶ συναγωγαί,（ラ）Collectiones medicae』全70（72とも）巻（25巻のみ現存）で、彼独自の知見は加えられていないが、ビザンティン時代にもよく読まれ、ラテン語のみならずシリア語・アラビア語にも訳されて、イスラーム世界にギリシア医学を伝える役割を果たした。」という。（松原著）

(2) テオプラストス：前372/370年頃～前288/286年頃。ギリシアの哲学者、科学者で、「「植物学の祖」と呼ばれる」という。「アテーナイでプラトーン、次いでアリストテレースに」学び、「プラトーンの死（前347）後、アリストテレースらと小アジアのアッソスで共同研究を行ない、以来アリストテレースと行を共にして、リュケイオン学園の創設にも協力（前335）」し、「アリストテレースの後を継いでペリパトス Peripatos, περίπατος（逍遥）学派の学頭となり（前332）、カッサンドロスやプトレマイオス１世の好誼を得て、大いに学園を発展させた。「学問一筋の人間」を自称する彼の講義には、２千人に上る学生が集まり、その中には喜劇作家メナンドロスや医師エラシストラトス、バレーロンのデーメートリオスらも含まれていた。」という。また彼の著作に関しては、「博学多識で総計23万2808行（あるいは23万2850行）もの広範囲の分野にわたる著作を多数残した。が、現存するのは、詳細な観察と実地経験をもとにした『植物誌 Peri phyton historia,（ラ）Historia Plantarum』（９巻）『植物原因論 Peri phyton aition,（ラ）De Causis Plantarum』（６巻）の植物研究書と、小論『形而上学 Ta meta ta physika（ラ）Metaphysical』、および最も有名な『性格論（人さまざま）Kharakteres,（ラ）Characteres』（機知と風刺を交えて種々の人間類型を描いた作品。（英）characters「キャラクター」の語源）などでしかない（以上の他、自然学関係の小論数篇と、ソークラテース以前の哲学史資料として重要な『自然哲学者の諸学説 Physikon doksai』、ギリシア諸ポリス polis の法制資料集『法律 Nomoi』の断片が伝わる）。」という。（松原著）

(3) ストラトーン：前335年頃～前269年頃。ミューシアーのランプサコス出身の哲学者で、「ペリパトス学派（逍遥学派）に属し、テオプラストスの弟子にして後継者」であるという。また「自然哲学をきわめて熱心に研究したため、「自然学者 Physikos, φυσικός」と渾名された。」という。彼の学説に関しては、「神はなく自然があるのみとし、宇宙のあらゆる現象は神の行為としてではなく、自然学の諸原因によって説明され得ると主張。特に彼の真空論（前280頃、「自然は真空を嫌う」、また「真空は人工的手段により作り出すことができる」などの学説）はエラシストラトスやクテーシビオス、ヘーローンに採用され、ヘレニズム時代の医学、工学に多大の影響を与え、無数の発明への道を開いた。諸分野にわたる沢山の書物（計13万2420行または33万2420行）を著わしたが、わずかな断片しか残らない。」という。なお、「師の死（前287）後18年間にわたりアテーナイのリュケイオン学園を主催した（前287～前269）。」ということであるが、死後、「学園は弟子のリュコーンに譲られたが、アリストテレースの著書の大半が他所に移されていたということもあって、ストラトーンを最後に独創的な研究を行なう学頭は現われず、以降ペリパトス学派は衰退へ向かった。」とされる。（松原著）

(4) イェーガーはすでに原文注記≪91≫で、Wellmann によるディオクレース「断片集」の147と141を指摘している。ここは原文注記≪105≫で141を指示しているが、それは「断片集」で９ページにわたる。古代ギリシアの医学思想を知るために、「断片集」の日本語訳が待たれる。

(5) イェーガーの論述を理解するために「健康時の摂生法について」の「一」の冒頭の一部を引いておく（『ヒポクラテス全集　第１巻』）。なお本継続研究（８）Ⅱ．12. の＜注記と考察＞（６）で、この「一」の全文を引いている。

「一般の人の食餌法はつぎのようにしなければならない。冬は、食物はできるだけ多目に、飲物はできるだけ少な目にする。飲物はできるだけ水で薄めないブドウ酒、食物はパンにして肉の料理はすべて焼いたものをとるようにし、この季節のあいだは野菜をできるだけ少しにする。こういう食餌をとっていると、体はもっとも乾性でしかも温かであるだろうから。だが春がやってきたら、そのときは飲物は冬よりも多目にして、…」

(6)「食餌法について」は、本継続研究（８）から（９）にかけての、Ⅱ．13. のイェーガーの論述を参照のこと。

(7) ドイツ語版ではアリストテレースのみの叙述となっているが、英語版でプラトーンも加えられ、「彼らは…」という説明になっている。

(8) βίος：生命、生活様式、生活ぶり。

(9) ‘suitable’（„pssend“）（ἁρμόττον）：ぴったり合う、調和する、適切な、適当な、ふさわしい。

(10) *proportion*（des richtigen Maßes）（σύμμετρον, μέτριον）：均衡、調和、釣合のとれていること、適度、中庸。

(11) die Analytik（分析論）は、アリストテレースとその学派にとっては形式論理学と同義であるという。（『哲学事典』平凡社、1971年）

(12) property「固有性」：「ある事物についての多様な規定のうち、その事物の可変的な規定をあらわす「状態」と区別してその事物をその事物たらしめるような持続的、本

質的規定のことを言う。」（『哲学事典』平凡社）

(13)「公理（axiom, Axiom）」：下記は参考のための、事典の説明からの抜粋である。

「ギリシア語の原義は品位を意味しているが、人々が共通に真または善と判断するものをさす。一般的には自明にして証明なしに真と受けとられる前提を意味する。公準と同一視されることもある。」「…（中略）…現代においては一般にかかる区別をせず、自明であると否とを問わず、演繹的体系の基礎にあってあらゆる証明の根本前提として証明なしに掲げられる命題を公理とよぶ。」（『哲学事典』平凡社）

「数学の論証の最初に置かれるべき言明の一種。ギリシア語の動詞アクシオオー（axioo）に由来するアクシオーマが語源である。エウクレイデスの『原論』では、「等しいものに等しいものは相等しい」,「全体は部分より大きい」などの言明を指す。広義には公準もが公理の一種と見られる。本来は対話的弁証法（ディアレクティケー）における議論の出発点として置かれる前提の意味であったらしい。数学の命題が不可疑のものと見られた時代には、公理は自明の真理と見なされ、批判的精神が旺盛な時代には、議論の出発点となるたんなる便宜上の仮説と見なされる傾向にあった。古代・中世においては、懐疑主義、プラトンの弁証法的議論、アリストテレスの形而上学的思索の影響もあって、数学的公理は形而上学（哲学）の基礎づけをまって初めて存在論的意味をもつべきものとされた。」（『岩波　哲学・思想事典』1998年）

なお、ἀξιόω は「価値を認める、尊敬する、真実と考える、判断を下す」などの意味が、また ἀξίωμα は「評価、名声、要求、自明の原理、公理」などの意味がある。（古川晴風編著『ギリシャ語辞典』大学書林、1989年）

(14)「仮設 suppositions」：「前提ともいう。数学、論理学などにおいて一つの命題をいい表わすにあたり、推理の出発点としてその最初におかれる判断もしくは規定をいう。結論に対する。」（『哲学事典』平凡社）

(15)「腸を空にする」、つまり排便する、ということ。

(16) diathesis（Diathese）：διά-θεσις は「整えること、配置、状態、態度、気持ち」などの意味があり、プラトーンの対話篇では「状態（あり方）」「持ち前」の意味をもつ ἕξις（ヘクシス）とは特別な使い分けはないという。（『プラトン全集　別巻　総索引』岩波書店、1978年）

なお、アリストテレースの「ヘクシス」（（心の）状態、態度）は、個人と教養・教育の思想にとって本質的意義をもつ。拙論「「人間」への問いと地域文化の創造――ギリシア思想の継承を考える」（都留文科大学社会学科編著『地域を考える大学――現場からの視点』日本評論社、1998年、所収）の中の「３　人間的なもの（ヒューマニティ）への問いと教育の病理」を参照されたい。

15. ギリシア的教養の本質としての「健康（health, das Gesunde）」の理想

＜訳文＞44p～45p

それにもかかわらず、おそらく、（前）４世紀のギリシア都市国家の市民によって送られた生活は、市民に、かつて人間によって送られた他のどんな生活よりも、自分の精神の

教養（the culture of his spirit, die Bildung des Geistes）と自分の身体の世話（the care of his body, Pflege des Körpers）に使われるより多くの時間を許した。（まさに：gerade）身体の世話の医術学説の実例は、ギリシアのポリスが、その民主的な形態（democratic form, demokratischen Form）においてさえ、一種の社会的な貴族政体（a social aristocracy, eine soziale Aristokratie）であったということを示している[(1)]；そして、それ（＝ギリシアのポリス）が獲得した一般教養（general culture, durchschnittlichen Kultur 標準的な教養）の高い平均的水準は、その事実に起因するのである。われわれの自身の専門化された生活様式によって生み出された（produced by our own professionalized existence, unseres Berufslebens：われわれの職業生活の）主要な類型（the main types, der Haupttypen）――商人、政治家、学者、労働者、あるいは農民――のたった一つも（この：dieses）ギリシア人の生活（life, Lebensstils：生活様式）の枠組みにぴったりと合うことはないだろう。そうした類型（types, Typen）がギリシアで（in Greece, zu jener Zeit：その時代に）発生してきていた限りで言えば、それら（＝そうした類型）は当時でさえ（すでに：bereits）その様式（the pattern, ihm：ギリシア人の生活様式の枠組み）の範囲外にあった。それにもかかわらず、ソークラテースの哲学とソフィストたちの論争の技術がどのように体育学校の中で（in the gymnastic school, in den Ringschulen 格闘技の学校の中で）発展したかを理解することはむつかしくはない（それだけいっそう理解する：begreift um so besser）。（というのは：denn）*kaloi kagathoi*，紳士[(2)]が終日そこで、自由な agon（広場）さえも骨の折れる専門化されたスポーツ（an arduous specializen sport, krampfhafte Spezialarbeit 懸命の専門トレーニング）に変えるほど熱心に、オイルを塗り、鍛錬し、身体をこすり、砂を振りかけ、再びそれを洗い落としながら過ごした、と思い描くのは見当はずれだろう。[(3)]プラトーンは三つの身体の徳――健康（health, Gesundheit）、強さ（strength, Kraft）、そして美しさ（beauty, Schönheit）――を、魂の徳――敬虔（piety, Frömmigkeit）、勇気（courage, Tapferkeit）、節制（temperance, Mäßigung）、そして正義（justice, Gerechtigkeit）――と、一つの（ただ一つの：einem einzigen）合唱を形成するように、結びつく（joining, vereinigt：一致させる）ものとして語る。[(4)]それらはみな、同様に、世界秩序の均整（the symmetry of the world-order, „des Weltgebäudes Symmetrie “世界構造の均整）、すなわち個人の身体的生活にも精神的生活にも反映される調和（the harmony）、を象徴している（symbolize, verkündeigen：告げる）。ギリシア人の医師とトレーナーが理解する体育（physical culture, die Däit des Leibes 身体の摂生）でさえ、精神的なことがら（a spiritual thing, etwas Beseeltes 何か生気あるもの）であった。それは、人間に一つの至高の規範（standard, Norm）を課した（imposed, prägt…ein：脳裏に刻み込ませる）――その身体的諸力の間に高貴で健康な均整（balance, Ebenmaßes 均整）を（厳格に：strenge）保持するということを。もし、そのとき、同等性と調和（equality and harmony, Gleichheit und Harmonie）[(5)]が健康と他のすべての身体的な完全さの本質であるとするならば、そのとき ‘health 健康’（das„Gesunde“）は、何か重大なことを意味するようになる――それは、全世界と全生活（die Welt und alles Leben in ihr 世界とそこで営まれる全生活）に適用される普遍的な価値基準（a universal standard of value, einem allumfassenden Wertbegriff すべてを包括する価値概念）へと成長する。というのは、その（＝健康の）根拠、つまり同等性と調和（equality and harmony）は、（この学説の基礎

にある考え方によれば）善い正しいもの（good and right, das Gute und Richtige）を産み出す諸力なのであり、しかるに貪欲（pleonexia, Pleonexie[6]、aggrandizement[7]）はそれ（＝健康）を乱す。ギリシア医学はこの学説（this doctrine, dieser „Weltanschauung“この世界観）の根であり果実でもあったのであり、つまり、その学説からそれ（＝ギリシア医学）は絶えず力と栄養（strength and sustenance）を手に入れており、またその学説は、個人的、種族的な個性によって生み出される変化にもかかわらず、古典期における全ギリシア人の共通の見地なのである。医学がギリシア的教養（Greek culture, der griechischen Kultur）（の全体のなか：im Ganzen）においてそのような代表的な地位にまで高まった理由は、それ（＝医学）が、直接的経験によってもっとも接近できる領域で、この根本的なギリシア人の理想（this fundamental Greek ideal, dieser Grundidee der griechischen Seele このギリシア人魂の根本思想）の不可侵の重要性を、明瞭に印象深く（clearly and impressively, am sichtbarsten und eindringlichsten もっとも明確かつ強烈に）、明らかにしたということであった。この高度な意味において、われわれは、ギリシア人の教養の理想（the Greek ideal of culture, das griechische Ideal der menschlichen Bildung ギリシア人の人間の教養の理想）は健康の理想（the ideal of Health, das Ideal des gesunden Menschen 健康な人間の理想）のことであったと言ってもよい。[8]

＜注記と考察＞

(1) イェーガーの、「ギリシアのポリスが、その民主的な形態においてさえ、一種の社会的な貴族政体であった」という指摘の意味を理解するために、以下でポリスのことを簡略に確認しておく。

ギリシア史の「前古典期」「古典期」は、前 8 世紀から前 4 世紀にかけての約400年のことを指して言われるが、「ポリス」の形成が主導的な位置を占める時代とされる（アテーナイがその典型とされる）。そのポリスについて、伊藤貞夫は「ポリスとは都市を核とする市民共同体国家であり、究極のところ市民団そのものの謂である」と述べ、その特徴を要約的に次のように説明している。

「市民団はポリスの初期には貴族と平民とに分れ、前者に政治・軍事・司法の実権が握られていたけれども、いわゆる古典期（前五・四世紀）になると、両者の別は実質的な意味を失う。ここにいたって市民団内部における支配・被支配の関係は消滅するが、しかし同時に市民団自体がひとつの特権身分と化して、在留邦人 metoikoi と奴隷とに対して極度の閉鎖性を保持し、いわば支配者集団としての相貌を現わす。他方この種の集団の内部には、成員たる市民相互の自己規制が様々な形をとって行われ、それが国家としてのポリスの存立を支えていた。」

（伊藤著『古典期のポリス社会』岩波書店、1981年、の「序　研究の視角」）

イェーガーのここでの論述は、上述の説明のようなアテーナイ市民団の特権性や、アテーナイの東地中海における交易による経済的繁栄、デロス同盟に基づく資金の利用、等々の事実を念頭に置いているのであろう。

アテーナイ市民と奴隷との関係については、次のような説明がある。

「…アテネにあつまった外人には自由業者、「文化人」もあった。プラトンはアテネの名門の出であるが、その弟子でアテネに学塾をひらいたアリストテレスは、

エーゲ海北岸のスタゲイラという小さなポリスの医者の子であった。ギリシアの学問を集大成したこの碩学も、その偉大さのゆえにアテネ市民に列せられるということはなく、解放された奴隷といっしょに在留外人の身分にとどまった。

解放奴隷がこの身分にいれられたのは、このころのアテネの奴隷がすべて商品として外地から輸入されたものだったことを思えば当然である。当時の奴隷の数については学者のあいだで見解がおおいにわかれているが、十万前後とみるのが穏当なところである。奴隷はその使役の目的により、召使的な家内奴隷と生産のためのそれとに大別できる。ヘシオドスの詩や古典期アテネの喜劇などから推せば、中以上の市民は二、三の家内奴隷をもっていた。彼らは重装歩兵の出陣に従者として武具、食糧をはこび、畑では農耕にしたがう。ただギリシアでは、のちのイタリアでのような何百もの奴隷をつかう大土地経営は発展しなかった。

工業に働く奴隷には、別居奴隷とよばれて収益のなかの一定額を主人に献納するものと、主人が所有し奴隷頭が管理する仕事場（エルガステーリオン）で何十人もいっしょに働くものとがあった。ラウリオン銀山の採掘も奴隷制にたち、一千人もの奴隷を所有してそれを採掘者に賃貸していた富裕者のことが伝わっている。しかし大きなエルガステーリオンは例外的で、経営の永続性にとぼしく、アテネの工業はせいぜい少数の奴隷しかもたぬ職人の小経営がおもだった。そして商工業では在留外人の役割が大きく、富裕市民は海上貿易への貸付とか、献納奴隷の所有とかを好み、エルガステーリオンの所有者でも直接の経営にはあたらず、金利生活者の色彩が濃かった。自給自足したうえ余剰生産物を売って換金する土地所有者が典型的な市民であり、ひとりの奴隷ももてず勤労を余儀なくされた大衆は、民主主義の仕組みにより、国家の力で楽しみ、いつかは土地、奴隷所有の階層にはいれることを夢みた。」

（村川堅太郎・長谷川博隆・高橋秀著『ギリシア・ローマの盛衰―古典古代の市民たち―』講談社学術文庫、1993年、pp.98-99.）

ところイェーガーは、続いて「商人、政治家、学者、労働者、農民」などの職業類型が現代のそれとは実質が異なることを述べている。このことに関連することとして、伊藤貞夫は、神殿エレクテイオン（前406年に完成）の建築碑文を根拠に、次のように述べている。

「当時のポリス市民にとって、手の技にしたがうのは必ずしも望ましいことではなかったが、生活のために手工業に携わる者はけっして少なくなかったのである。彼らも、また、外人や奴隷も、一日の手当て額はみな同じであった。ただし奴隷への手当が彼らの所有者の手に入ったことはいうまでもない。

大工・石工・指物師・彫刻師・金細工師といった各種の工人の存在が碑文から知られるが、神殿建築には、このほかにも、例えば、材料を入れる貿易商人、船乗りや陸上の運送に携わる者、それに単純な力仕事にしたがう者など実に広い範囲にわたる働き手の参加が必要だった。

材料の買付と納入にあたる商人や比較的多数の工人奴隷をもつ手工業者、あるいは建立の指導にあたる建築・彫刻・絵画の専門家をのぞけば、神殿建築に関係する働き手は、すべて奴隷か下層の自由人である。そのなかには、生活にさして

余裕のない下層のアテネ市民も数多く含まれていた。一連の神殿建築は、彼らにとって日々の糧をうる好個の手段となったはずである。またそこに、ペリクレスのねらいの一つがあった。そのための国庫からの大量の支出、その背後にはデロス同盟の豊富な資金がひかえていた。」

（伊藤『古代ギリシアの歴史―ポリスの興隆と衰退―』、講談社学術文庫、2004年、pp.238-239.）

また伊藤は、イェーガーの職業類型の指摘に関連してということであるが、「ペリクレスの死とその後継者たち」のことを述べながら、次のようにも説明している。

「…ところが、ペリクレスの死後に登場したアテネ政界の指導者たちは、そのほとんどが手工業者たちであった。永いアテネの歴史のうえで政治の表舞台にのぼることのかつてなかった人々である。皮鞣しと靴造りを営むクレオン、ランプ製作場の所有者ヒュペルボロス、竪琴造りと呼ばれたクレオフォン。のちにソクラテスを告発して死にいたらしめた黒幕アニュトスも皮鞣し業者であった。」

（伊藤『古代ギリシアの歴史―ポリスの興隆と衰退―』、p.253.）

イェーガーは、このようなアテーナイ市民の特権性と経済的優位さ、そしてその労働様式・生活様式の実相をもって、「ギリシアのポリスが、その民主的な形態においてさえ、一種の社会的な貴族政体であった」と指摘しているのであろう。

なお、古典期アテーナイの政治・社会的研究は、伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会、1982年、を参照のこと。

(2) ドイツ語版では καλοκἀγαθοί となっている。καλὸς κἀγαθός：（氏素性の点からも教養の点からも）紳士として申し分のない、善美の、美しく立派な。

(3) イェーガーのここの叙述（および14節の叙述）に関連してということであるが、高津春繁がギリシア人の生活について次のような説明をしている。

「食事のあとの一日中最も暑いときを家のうちの陰で過し、夕刻にむかう涼しい時刻に再び外に出て、運動場（ギュムナシオン）や競技場あるいは市場に赴き、運動競技に、政治や思想上の談話や講演に時を送る。夜は宴会などのないときは早く床についた。人工的な灯火の発達していないこの時代には、早起き早寝が一般の習慣であった。競技場や運動場には公私両様あったが、公けのものは単に体育のみならず、智的な探求や議論の場所としても利用せられていたのであって、プラトン及びその後継者はケピソスに近いアカデメイアのオリーヴの森の中にあった運動場を、アリストテレスはアポロン・リュケイオスの聖森中の運動場を根拠として、ここに自ら一種の大学のごときものが発達したのである。」

（『古典ギリシア』講談社学術文庫、2006年、1964年出版のものの文庫化）

(4) ここでイェーガーが述べていることは、プラトーンが対話篇『国家』で主題としていることがらであり、対話篇の特定の個所を指示しているのではない。ここでは参考のために、『国家』の第三巻18の一部（412A ）から一部を引いておく（藤沢令夫訳、岩波文庫（上）、1979年）。

（ソークラテースの発言）

「こうして、どうやらこれらの二つのもののために、ある神が二つの技術を人間に与えたもうたのだと、ぼくとしては主張したい。すなわち、気概的な要素と知

を愛する要素のために、音楽・文芸（music, μουσικήν）と、体育（gymnastics, γυμναστικὴν）とをね。これらはけっして、魂と身体のために――副次的な効果は別として――与えられたのではなく、いま言った二つの要素のために、それらが適切な程度まで締められたり弛められたりすることによって、互いに調和し合う（the harmonious adjustment, ἀλλήλοιν ξυναρμοσθῆτον）ようにと与えられたものなのだ」

（ソークラテースの発言）

「してみると、音楽・文芸と体育とを最もうまく混ぜ合わせて（blends, κεραννύντα）、最も適宜な仕方でこれを魂に差し向ける人、そのような人をこそわれわれは、琴の絃相互の調子を合わせる人などよりもはるかにすぐれて、最も完全な意味で音楽的教養のある人、よき調和を達成した人であると主張すれば、いちばん正しいことになるだろう」

(5) equality（Gleichheit）を「同等性」と訳したが、本継続研究（５）のⅡ．２．では、イソモイリアー（同じ分け前、共有）を「全基礎的要素の同等性（equivalence）」（ドイツ語版：有機体の基礎的な諸要素の間の同等の関係）と説明している。

(6) πλεονεξίᾱ：貪欲、欲望、増大、過剰、などの意味がある。

(7) aggrandize：…を拡大する、…の力 [勢力、富など] を増大 [増強] する。

(8) 本章の「パイデイアーとしてのギリシアの医術」（Greek Medicine as Paideia）は、英訳版では第４編の第１章として配されており、次の第２章は「イソクラテースの修辞学とその教養理想」になるが、ドイツ語版では第３篇の最初に配され、次章以下のソークラテースとプラトーンに関する叙述に入っていく。したがってドイツ語版では、そのような文脈で、次の文章が入っている。

「ギリシア医術における、健康な人間（des gesunden Menschen）という理想像の理論的明確化と教育的現実化の仕事が、教養（Kultur）の全般にとって、またパイデイアー（Paideia）の哲学的基礎づけにとって意味していることを、魂の健康としての徳（Arete）の本質を知るソークラテースとプラトーンが最も明瞭に示している。」

≪原文注記≫

86. 19p を参照のこと。「食餌法について」２，51は「古来の医術について」20をにおわせている。（１→70）

87.「食餌法について」１．２（Littre Ⅳ，472）；また「空気、水、場所について」１-２を参照のこと。われわれはそこに、「食餌法について」の著者におけるのと同様に、順を追って論じられた次の要素を見出す：諸々の季節、諸々の風、町の位置、夏と冬のそれぞれに予期される諸病、諸星の昇り沈み、諸病の変化。「食餌法について」で（その原本の抜粋に際し：beim Exzerpieren seiner Vorlage）唯一無視されていることは水利の特質である。（２→71）

88.「異国の諸都市への訪問」（=「流行病」）6.5.5

89.「食餌法について」2.61.（３→72）

90.「食餌法について」2.65（その終わり）.（４→73）

91. ディオクレース「断片集」147と141　Wellmann.（5→74）

92. 私の『カリュストスのディオクレース』（Berlin 1938）p.67f. を参照のこと。

92a. 彼の、その主題についての見解を参照のこと、「食餌法について」1.1.

93. R.Burckhardt's *Das koische Tiersystem, eine Vorstufe der zoologischen Systematik des Aristoteles*（*Verhandlungen der Naturforschenden Gesellschaft in Basel*, 15, 1904）,p.377f を参照のこと。

94.「食餌法について」がコース学派に属していないということを証明しようとする最新の執筆者は、*studien zur hippokratischen Schrift* Περὶ διαίτης（Tübingen 1933）の中の A.Palm である；7 p を参照のこと。しかしながら彼はまだ、著作の源が比較的に早期であることを信じている。

95. Epicrates, 断片集287　Kock.

95a. この人物については、M.Wellmann, *Fragmente der sikelischen Aerzte*, p.69, と私の『アリストテレース』, pp.17-20. を参照のこと。

96. A.Palm の、注94で引いた著書の、p.8f. を参照のこと：彼は「食餌法について」の著者によって示されている植物学的な知識を、その文脈では研究していない。

97. p.22. を参照。（本継続研究（6）のⅡ．3．；紀要の266p）

98. そのくだりは、Littre,Oeuvres d' Hippocrate x ,479. に集められている。

98a. A.Palm（注記94で引かれている），p.43.f を参照のこと。

99. エウドクソスについては、私の『アリストテレース』，pp.17and131f. を参照のこと。クテーシアースは、403年以降に、アルタクセルクセース王の宮廷医であった（クセノポーン『アナバシス』1.8を参照）：彼は自分の著作を 4 世紀に書いた。

100. 私の『アリストテレース』の pp. 39and162, そしてとくに p.162 の注記 1 を参照のこと。（ドイツ語版では「S.37f.und165f., besonders166Anm.1.」と指示されている。）

100a.「食餌法について」4.1.（6→75）ピンダロス（7→76）の断片集131（Schröder）とアリストテレースの断片集10（Rose）（8→77）（さらに、それについての私の『アリストテレース』p.162、注記 1）を参照のこと。

101.「食餌法について」1.1.

102. この重要な医者の広範囲にわたる著作の断片は、M.Wellmann の *Die Fragmente der sikelischen Aerzte*（Berlin 1901）p.117f. に収録されている：それらは、Wellmann がシケリアー学派として叙述するものの主要な部分を構成している。私の *Diokles von Karystos,Die griechische Medizin und die Schule des Aristoteles*（Berlin 1938）では、私は、ディオクレースは、シケリアー医学派の学説の影響を受けているけれども、それと直接関係があるわけではないし、それと同時代のものでもない、ということを示してきた。

103. 私の『カリュストスのディオクレース』の p.14を参照のこと。

104. 私のディオクレースについての著書には、pp.16-69に、アリストテレースがディオクレースに与えた語法上、学問上の影響の詳細な証明がある；さらに、私の論文 *Vergessene Fragmente des Peripatetikers Diokles von Karystos*（原文注記 9 で言及）も参照のこと、それは pp.5と10f. で、ディオクレースの、テオプラストスおよびストラトーンとの関係をかなり詳しく扱っている。

105.「断片集」141. Wellmann.

105a. ディオクレースがその医学研究の基礎としている知的原理の記述については、（私の『カリュストスのディオクレース』 の中の） 次の節を参照のこと：Das grosse Methodenfragment（p.25），ἀρχαὶ ἀναπόδειχτοι（p.37），Diokles' Diätlehre und aristotelische Ethik（p.45），Diokles und die aristotelische Teleogie（p.51）.（９→78）

106. 私の『カリュストスのディオクレース』p.48の私の引用文を参照のこと。

107.『カリュストスのディオクレース』の p.50を参照のこと。

108. ディオクレースの断片集（Wellmann）112、と、『カリュストスのディオクレース』, pp.25 - 45における方法を扱ったくだりの私の詳細な取り扱い、を参照のこと。

109. 以降に述べることは、ディオクレースの断片集（Wellmann）141を参照のこと。

110. p.37. を参照のこと。(10→79)

111. ギリシア医術におけるこれらの社会的前提については、*Die Antike* の第Ⅶ巻（1931）S.257ff. にある Edelstein の *Antike Diätetik* を参照のこと。「食餌法について」3.69, と3.68の最初の部分を参照のこと。(11→80)

＜注記と考察＞

〔≪原文注記≫の＜注記と考察＞の番号を、章として連続させるために（小論での番号→章としての通し番号）というように記す。〕

（１→70）原文注記で19p と指示されている箇所は、小論では本継続研究（６）のⅡ．１（「１」節としているが、章として連続させるために節番号を「１」から「７」へ変更する。）259p の末尾である。

「食餌法について」の該当箇所は、全文で次のようである（『ヒポクラテス全集　第２巻』）。

> 「チーズは強性で、体を焼けるように熱くし、栄養があり、便通を止める。強性なのは、もとのものにきわめて近いからである。栄養があるのは、ミルクの実質的な成分が残っているからである。体を焼けるように熱くするのは油っこいからである。便通を止めるのは、イチジクの汁と凝乳剤によって固まっているものだからである。」

「古来の医術について」の該当箇所を、下記に抜粋しておく（小川政恭訳『古い医術について』岩波文庫)。なお下記の抜粋個所は、本継続研究（６）の≪原文注記≫の＜注記と考察＞（７）における引用個所と一部重なる。

> 「…なぜかというに医者にとっては、いやしくもその務めを果たそうとする以上、自然について少なくとも次のことを知り、また知ろうと熱心につとめることが必要だからである。すなわち人間が食べもの飲みものに対する関係、その他の習慣に対する関係、それらの各々から各人に生じる結果はなにであるかを。それは単にチーズは有害な食べものである、腹いっぱい食べると苦痛を与えるから。という具合にであってはならない。それがどんな苦痛か、そしてなぜおこるか、そして人体中のなにに適合しないのかを、わたしたちは知らなければならないのである、他にも同一ではない仕方で人間をおかすところの飲食物があるのだから。それゆえ次のように説明してみよう。薄めてない葡萄酒は多量に飲むと、人にある種の害をおよぼす、

このことを知っている人は皆、原因は葡萄酒のこのような作用であって、葡萄酒自身でないことを知るであろう。さらに、人体のどの部分を通じてこの作用をおよぼすかをも、わたくしたちは知っている。この種の真実を、その他のものについても示そうと思う。わたしはチーズを例に用いたが、チーズはあらゆる人を苦しめるわけではなく、人によっては腹いっぱいこれを食べてもなんら害を被ることがない、体にあう人には驚くほどの強健さをあたえさえするが、またどうしてもこれに勝てない人もある。これらの人々は体質を異にするのである。その相異とは、体内にチーズに敵対するものがあって、このものによってかきたてられ活動させられる点にあるのである。このような体液が比較的多くあって体内でよけいに勢力をもっているところの人々は、よけいに病むのが道理である。しかしもしチーズがおよそ万人の体質にとって有害であったならば、あらゆる人々がそこなわれるはずである。以上のことをわきまえている人ならば、次のような過ちをおかすことはないであろう。」

（2→71）「食餌法について」の直接的な該当箇所は（イェーガーの続く論述に該当する部分も含めて確認すると）下記のとおりである（『ヒポクラテス全集　第2巻』）。なお下記の抜粋個所は、本継続研究（8）の≪原文注記≫の＜注記と考察＞（32）における引用個所の一部である。

「…そればかりでなく、運動の、食物量や人間の体質や体の年齢とのつり合いや、一年の各季節とのつり合いや、風の変化とのつり合いや、生活をいとなむ地域の状況とのつり合いや、一年の気候とのつり合いもよく知らなければならない。また、星の上昇と下降も知らなければならない。人間に疾病をもたらす食物や飲物や風や全宇宙の、変化や過剰に気をつけることができるようにするためである。しかしこれらすべてをよく知ってもまだ十分にわかったとはいえない。これらのことに加え、各人の体質にみあう食物と運動の適量を、つり合う数量が過不足のない状態で把握できたならば、その人たちの健康が厳密にわかったことになろう。しかし現実には、前述したことはすべてどうなっているかわかっているが、いま述べた点はわかっていないのである。」

「空気、水、場所について」の第一節、第二節の直接的な該当箇所は下記のとおりである（小川訳、岩波文庫）。

「正しい仕方で医学にたずさわろうと欲する人は、次のようにしなければならない。まず、一年の諸々の季節がそれぞれどんな影響をおよぼす力があるかを考慮しなければならない。なぜならば、諸々の季節はたがいに類似してはいず、季節同士および季節の変り目にひじょうな相異があるからである。次に考慮しなければならないのは、暖および寒の風、とくにあらゆる場所にいる人々に共通な風と、それぞれの地域に特有な風である。それからまた、いろいろな水の性質をも考慮しなければならない。水は味と重さに相異があるように、それぞれの性質にも非常に相異があるからである。したがって、医者は未知の町に着いたならば、その町の位置が風の点と太陽の昇りの点からいってどうであるかをよく吟味しなければならない。北の方角にある町と南の方角にある町、太陽の昇る方角にある町と沈む方角にある町とでは、けっして同じ性質ではないからである。これらのことをできるだけよく考慮し、また水についてそれがどんな状態にあり、人々は沼地の軟性のものを使って

いるのか、それとも硬性で高地の岩山から来るものを使っているのか、それとも塩辛くて粗い水を使っているのかを考慮しなければならない。…」（第一節）、「…そして時と年の経過につれて、夏や冬にどの病気がその町に一般に流行するであろうか、また各人に固有の病気でどんなものが生活様式の変化によっておこる危険があるかを、告げることもできるであろう。なぜならば、これらのどれもにとって条件であるところの、諸々の季節の変化や諸星の昇り沈みを知っているならば、その年がどんな性質のものになるかを予知できるであろう。以上のような具合に考察し、時期を予知するならば、個々についてもっともよく知り、もっともよく健康を得、もっともよく医術の施行に成功をおさめることができるであろう。そしてもし熟考の結果、これらは天文学に関することであると思われるならば、天文学の医学に対する貢献が僅少でないどころか、実に絶大であることをその医学者は知ることになる。人間にとっては、諸々の季節と同時に、諸病も胃腸も変化するからである。」（第二節）

なお、この原文注記の「空気、水、場所について」の訳では、小川訳（岩波文庫）に照応する訳語を選んだ。

（３→72）「食餌法について」の該当箇所を、イェーガーの続く叙述にも関連してくるので、全体として引いておくと下記のとおりである（『ヒポクラテス全集　第２巻』）。

「運動について、それにはどんな効力があるか、以下のように認識すべきである。実際、運動には、自然なものと過激なものとがある。自然な運動とは、見たり聴いたり発声したり考えたりする運動である。見る運動の効力はつぎのとおりである。すなわち、魂が、見る対象に注意を向けると、魂は動いて熱くなる。熱くなると湿性分がなくなって乾く。また、聴くことによって魂が騒音におそわれると、それは震えて苦痛を感じる。苦痛を感じると熱くなって乾く。人間の思考に関していうと、魂は、その作用で動いて熱くなって乾く。湿性分が消耗すると魂は苦痛を感じる。すると肉質は空虚になってその人は痩せる。声の運動は、話すことであれ読むことであれ歌うことであれ、すべて魂を動かす。魂は動くと熱くなって乾き、湿性分を消耗する。」

（４→73）「食餌法について」の該当箇所は下記のとおりである（『ヒポクラテス全集　第２巻』）。

「オリーブ油に水を混ぜて塗ってマッサージするのは、体を軟らかくし、体が極端に熱くなるのを防いでくれる。」

（５→74）M.Wellmann, *Fragmentsammlung der Griechischen Ärzte*（『ギリシアの医者たちの断片集』）1901, Berlin

（６→75）「食餌法について」4.1. は、Ⅱ. 13. ＜注記と考察＞（10）に引用。

（７→76）ピンダロス：前522/518～前442/438。古代ギリシア最大の抒情詩人で、「幼少時より作詩・音楽の手ほどきを叔父から受け、またアテーナイでラーソスやシモーニデースらに学んだのち、テーバイへ戻って女流詩人コリンナおよびミュルティス Myrtis, Μυρτίς から詩作の要諦を教わったという。」とされる。また「弱冠20歳にしてすでに合唱抒情詩人として名声を馳せ、以来80歳の高齢で没するまで、全ギリシア世界の王侯貴族の恩顧を蒙り、彼らの賓客となり多数の頌詩を寄せた。」という。その作

風と評価に関しては本継続研究（5）のⅡ．2．＜注記と考察＞（6）で引いたが、「その作品ははるか後の近世ヨーロッパの詩人たち、フランスのロンサールや英国のドライデン、トマス・グレイ、ドイツのゲーテ、ヘルダーリーンらにも影響を及ぼしている。」ということである。（松原著）

イェーガーが原文注記で指摘している箇所は、下記のとおりである（内田次信訳『ピンダロス　祝勝歌集／断片集』京都大学学術出版会、2001年）。

「肉体は、どの人間でも、力強い死につき従うが、
命の似姿はまだ生きて残される。これだけは
神々に由来するのだ。四肢が動く時それは眠っている。だが眠りの中では、
しばしば夢見で、
喜びの、また苦しみの、迫りつつある決定をそれは明かす。」

（8→77）アリストテレースの断片集の該当箇所は下記のとおりである（『アリストテレス全集　17』岩波書店、1972年）。

「（1）アリストテレスは人間どもに神々の観念が生まれるのは、二つの始源から、すなわち、霊魂に関する事象からと、天空の事象からとであると論じていた。霊魂に関する事象からとは、睡眠の中におこる霊魂の霊感と卜占とによる。すなわち、彼が言っているには、睡眠の中に霊魂が自分だけになった場合、その時、本来固有な本性を取得して、未来のことを占い予言する。霊魂は死に当たって肉体から離れるに際しても、このようなものになる。彼は詩人のホメロスも、このことを見きわめていたことを認めている。すなわち、パトロクロスは滅びるに当たってヘクトルの死を予言し、ヘクトルはアキルレウスの最期を予言するのを詩に作った。そこで、これらのことから、本来的に霊魂に似ていて、すべてのものの中で最も知識にすぐれた神的なものが存すると人々は考えるに至ったと彼は言っている。ところで、天空の事象からもまたそのようで、すなわち、昼は太陽の運行するを、夜はその他の星の秩序ある運動を眺めて、このような運動と調った秩序との原因である神なるものが存すると人々は信ずるに至ったのである。

このようなのがアリストテレスの見解である。

（2）それ故、霊魂が眠りによって肉体との連結、接触から解き離されると、その時、既往を想起し、現在を認識し、将来を予見する。眠れる者の肉体は死者のそれの如く、臥してはいるが霊魂はしかし、生気づいて活動している。それにもまして死後は全く肉体から脱するので、そのようであろう。それで、死が近づけば、ますます神的になる。……ポセイドニオスは、彼が伝えている例を以て、死にゆく者が予知することを確かとしている。……ホメロスのヘクトルが死に当たり、アキレウスの死の近きを告げた所以もそこにある。」

（9→78）イェーガーが指摘している個所は、自著『カリュストスのディオクレース』の第1章 Aristotelisches in Sprache und Denken des Diokles（ディオクレースの表現法と思考におけるアリストテレース的なもの）の中の節である。

（10→79）小論ではⅡ．13．の第2段落に該当する。

（11→80）この原文注記はドイツ語版と英語版の双方を生かした。その英語版で指示されている「食餌法について」の3.68は、下記のように書き始められている。なお、英訳

版で指示されている「食餌法について」の「３．69，と3.68の最初の部分」という記述は、「３．68，と３．69の最初の部分」とするのが正しいようである。

「まず第一に私は、以下の点に該当する多くの人々のために、とくに役立つことを書き記すことにする。すなわち、ありあわせの飲食物しか利用しなかったり、必要に迫られて労働したり、必要に迫られて歩いたり、生活に必要なものをかき集めるために海の仕事を行なったりして、有益でないにもかかわらず体が温まったりあるいは冷えたりするなど、一般に不規則な摂生法をとっている人々である。こういう人々は、事情が許すかぎり後述のような摂生法をとるのがよい。…」

また3.69の冒頭は、下記のようになっている。

「以上は、行きあたりばったりの生活を送らざるを得ず、何はさておき健康に気をつけるということはない多くの人々に私が忠告することである。これに対し、以上のことをすでに心がけ、健康なしには富をはじめいかなるものも価値がないということを承知している人々のためには、私は、可能なかぎりでの最高度の精密さに達した摂生法を見出してきた。その摂生法は話を進めていくにつれて明らかにしていくことにする。…」（引用は『ヒポクラテス全集　第２巻』より）

＜全体の考察＞…本継続研究（11）を予定する

Ⅲ．現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート③～継続研究（９）における～

〔**Ⅲ．の趣旨について**：イェーガーは『パイデイア』第１巻の「序文」で、「今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」という確信がこの著を生んだと語り、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようと努めるすべての人びとのためにも向けられている。」と述べている（本継続研究（３）、Ⅱ．第１章＜訳文①＞）。イェーガーはこのように、現代という時代の課題の洞察を含んで古代研究に向かい、大著を完成させている。本継続研究は、このようにして成し遂げられた研究の瑞々しさに触発されてのものであり、『パイデイア』を読みながら考察意欲を引出されている諸点についても、この拙論そのものとして展開することはできないけれども、『パイデイア』研究の一環として記してみようと思う。〕

α．古代ギリシアにおける食餌法の思想・学説と松下拡の健康学習の社会教育実践・理論

イェーガーは、古代ギリシアポリスの市民のための（= 素人 ιδιωτης，layman のための）食餌法（= ダイエット）学説をパイデイアー思想形成の見地から研究し、それが紀元前４世紀の中期に教養思想として重要な結実を見せると述べている。そのように歴史的に展開されていった古代の食餌法の学説は、戦後社会教育の、松下拡に代表される、住民の「健康学習」の実践・理論の直接的な源流と判断してよいものである。古代ギリシアの食餌法思想を現代の「健康学習」論の源流と観るとき、「健康学習」のなかに、「健康」維持の思想の、つまり身体に止まらない教養・教育の思想の、骨格を理解していく道筋が見えてく

る。古代の食餌法の思想は、さらには、日本国憲法第25条の「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」という規定を、教養・教育の思想（=human nature の思想）として受け止めていく必要性を考えさせる。

【資料－6】松下拡『健康学習とその展開―保健婦活動における住民の学習への援助』（勁草書房、1990年）の「序章　健康学習への接近　1．これから何を考えたいのか」

「自分で自分の健康を管理するという、いわゆる自己管理の能力はどのようにして身につくのであろうか。自己における健康管理とは、専門医の力を借りて、健康に関するゆがみを是正しながら痛みや苦しみを解消させるというような、より直接的な場合と、その痛みや苦しみが起きないように、自分の健康をゆがめないように、ゆがみに向かう傾向を早期に発見してそうならないように日常生活の中で自己管理する場合とがある。健康保持、回復のための自己管理の能力をいかに身につけるのかという課題について、後者の場合に焦点をおいて、その能力形成と援助のあり方を考えてみたい。この能力形成の営みを健康学習と考える。

例えば、肥満は健康によいことではない、それは身体におけるいろいろな機能を低下させ病気を生み出すことになるということは、かなり巾広い程度の差はあるが、誰もの知識の中にある。そして肥満は健康上問題であるという意識はどこかでもっている。しかしその意識の内容と質は人によってかなり異っている。そして問題解決へのとりくみ（実行）は、その人の気づき（肥満は問題であるという意識）の内容と質によって左右されるものである。

日常生活において、その問題の解決のための実行が困難でつらくてもがんばり通している場合は、そのことへの本人の問題意識が深い場合であるし、途中であきらめたり、とりくまれない場合は、たとえ他に行動を阻害する条件はあっても問題意識がその人の内面に深くすわっていない場合である。健康問題を解決したり、健康を保持増進することは、どんな場合でも、日常生活の中で実践されなければ意味がないし、それが継続されなければ効果はあがらない。健康における自己管理能力とは、まず日常の生活の中で、問題意識と結びついて継続的に実践することのできる力としてとらえられなければならない。そしてその実践することの内容がその人の実態にとって適切でなければならないわけだから、その内容を決定する力（専門家の援助を受けることも含めて）も必要であり、その人のできる方法を自らが決定する力も必要となってくる。

したがって、自己管理能力とは、それらを決定できる能力と、それを継続させる能力とが、本人の内面で統合され、実践する意志と結びついた姿でとらえられなければならない。「今私は何をどのように実行しなければならないか」という内容と方法を、具体的な目的意識にもとづいて自己決定できる力を身につけることである。それは自分自身の問題をより深く「問題」として把握（認識）することによってうらづけられるものである。

自分の問題が指摘され、その問題解決の方法が教えられることは必要ではあるが、そのことが本人の内面の意識でとらえられ、本人の意識と深く結びついてすわらないと、一時的なとりくみは見られても継続しない。知識として認識されても実

行に結びつかない。日常の中の他のことの方が、優先されてしまうのである。

実行を生み、それが継続されるには、本人の意識と実行継続への意志が生まれなかったらそれは不可能である。この原則は極めて自然なことなのであるが、実際にはむずかしいことである。本人に問題を説明し、理解をうながし、その問題解決のための方法を指導して、実行の方法を示せば本人は実行できるだろうという一方的な教育（指導）意識では、なかなか実践は生まれ出てはこないのである。そこに日常住民の人たちにかかわって住民の実践を期待している保健婦の悩みがある。そしてここに健康問題にとりくむ学習のあり方を考えるという現実的な課題がある。

それは、問題をもっている――したがって問題を解決しなければならない本人としてのひとりひとりが、いかにして自分の問題に気づくか。その「気づき・発見」（現状認識と問題意識）をいかにして、その内容と質においてより深いものにするか、というところに焦点をあてて考えることである。そしてそれを「学習のあり方」として考えるには、本人が解決しなければならない問題として、その問題を確認するに至る過程が重視されなければならない。

健康に関する（自然科学的な）様々なことを縦軸としてすえるならば、学習とは学ぶ方法の横軸として、それの交わる営みとしてとらえることができる。その両軸の交わる接点は上下にも左右にも絶えず移動し、その交わり方がより適切で系統性と連続性をもって継続されることによって健康問題が自分のものとして、内面にしっかりと位置づけられる。学習の条件を設定し、学習を援助するということは、その交差する状況を的確に支えることである（図１）。

グループや組織でとりくむ活動も、教室での学習も、或いは個別のかかわりにおいても、その目的としてねらうところは、個々の健康管理能力の形成である。健康で生きることのより直接的な姿とその条件は、個々の実態と結びついたより具体的なことであるということを確認する必要がある。」

（…引用に際しては図１と注記を略した…）

β．加藤周一の「現代と神話」（「夕陽妄語」：朝日新聞2008年２月23日）とイェーガーの『パイデイア』、そして勝田守一の『能力と発達と学習』

評論家の加藤周一（1919~2008・12・５）は、新聞コラム「夕陽妄語」（朝日新聞2008年２月23日）で「現代と神話」というタイトルの文章を発表しているが、そこで、彼は相次いで他界した二人の知識人、高杉一郎と小田実を追悼しつつ、「追悼」の趣旨をはるかに超えて、古代ギリシアの「哲学と神話」の世界史的普遍性の「輪郭」を述べていく。ギリシア神話と悲劇の「神（神話）対人間（個人）の争い・戦い」の構造は、「人と人とが争う近代劇」のそれと異なり、「組織と個人が相対する社会的現実の構造に似る」という。それゆえに加藤は、「ギリシア悲劇はその意味で、現代と古代をつなぐ糸である」と指摘し、「同じ糸は、東北アジアの古代と現代との間にはない。故にアジアは古代ギリシアに向かわざるをえない。」と結論する。加藤が述べていることは、（世界史のなかで）古代ギリシアにおいて、人とそれを超える存在との対決の中に「個人」が明確に意識されていった、ということになるだろう。(1)

古代ギリシアにおけるこの「個人」の意識化の過程と教養・教育の思想の形成は、一体

的なものである。加藤が追悼文中で光を当てる『イーリアス』についてであるが、たとえば古代研究者の伊藤貞夫は、「オリンピアの競技とほぼ同時期に成立し、以後永く、民族の共有財産としてギリシア人の愛誦の的となったものにホメロスの詩がある。」と述べ、その叙事詩が、貴族に止まらない民衆を含む全ギリシア人の共通の財産となっていったことを、次のように説明している。

「『イリアス』『オデュッセイア』の二大叙事詩は、文学や美術の創造に携わる人々にとって偉大な模範、創作意欲と題材とを、ともに与える源泉となった。そればかりではない。すべてのギリシア人にとって、ホメロスの詩はいかに生くべきかを学び、兼ねて、日常のこまごました生活の知恵を身につけるための教本でもあった。幼い子供にこの詩篇を暗誦させることも行われたらしい。

二つの詩は古代ギリシア人の心の襞にしみとおり、彼らの考え方や感じ方に決定的な影響を与えたのである。」（『古代ギリシアの歴史』講談社学術文庫、2004年）

イェーガーの『パイデイア』の第一篇は、このホメーロスの世界の、貴族の教養（Kultur）と教育（Erziehung）の叙述から始まり、第２篇は、アイスキュロス、ソポクレースの悲劇の世界の叙述から始まる。そのイェーガーは、『パイデイア』の「序論」において、ギリシア人の歴史の始まりが「個人の価値という新しい考え」の始まりとなる、と次のように述べている。

「…東方の、あらゆる自然の調和を遥かに越えた一人の神王の賞賛（それは、われわれとはまったく異なる形而上学的な人生観を表明している）と、東方の大部分の人びとの抑圧（それは君主のあの半宗教的な権力的高まりの系譜である）とに対し、ギリシア人の歴史の始まりは、個人の価値という新しい考え（a new conception of the value of the individual, einer neuen Schätzung des Menschen 新しい人間の尊重）の始まりであるように見える。そして、信念――キリスト教が広めようと最大限のことをなしたもの――つまりそれぞれの魂はそれ自体無限の価値をもつ一つの目的である（each soul is in itself an end of infinite value, des unendlichen Wertes der einzelnen Menschenseele 一人ひとりの人間の魂の無限の価値）という信念こそ、また、ルネサンス期とそれ以降に公然と述べられた理念、すなわちすべての個人が自分にとっての法である（every individual is a law to himself, der geistigen Autonomie des Individuums 個人の精神の自律性）という理念こそ、あの新しい考えそのものだと思うことを控えるのは困難なことである。そして、ギリシア人の人間人格の価値（the value of human character, die Würde des Menschen 人間の尊厳）の認識なくして、どうして（近代 Neuzeit が与えている：ドイツ語原文）個人の価値と重要性を要求する権利（claim, der Anspruch 請求権）が正当化され得ようか。」（本継続研究（２）のⅡ．４.）

この「個人の価値」という思想は、戦後日本の憲法・教育基本法（旧法）の根幹の思想となっているが（本継続研究（４）＜全体の考察〔B〕＞の＜注記と考察＞（１）を参照）、当然にも現代の教育の中心思想となるべきものである。例えば勝田守一は、戦後日本教育学の最高の古典というべき『能力と発達と学習』の「序章　未来にかかわる時点で」において、‘人材養成計画なるもの’を批判しつつ、次のように述べている。

「…この信頼しがたい人材計画の中で行なわれる教育は、子どもの未来に対して

責任をもっていないということも明らかになる。「子どもの未来」とはなにか、という問題は深い意味をもっている。社会がすべての子どもにその能力の成長を期待し、教育は、基本的には、親が子どもにその生涯の全体に対して成長を望むという事実に基づいている。いま、私たちは、社会的な組織された教育について考える前に、そのことを確認しておきたいのだ。それは、統計上の総体とか、その部分の相互代替の可能なある量とかの観点で「養成」を計画することとはちがうのだということでもある。かけがえのない個人の生命と成長とを教育の基本にすえるということだ。」（国土社、1964年）

戦後日本の教育学をリードした‘勝田教育学’は（その「教育的価値」論を含め）、この「個人」という世界思想の継承を核心にして、教養・教育の営みの本質を洞察していこうとしている（『能力と発達と学習』の第四章では、勝田は直接にイェーガーの『パイデイア』に光を当てている）。[(2)]

【資料－７】加藤周一「現代と神話」（「夕陽妄語」：朝日新聞2008年２月23日）

「今年（2008）の初めに『極光のかげに』（1950）で有名な高杉一郎氏が亡くなった。それより早く昨年の夏に、私たちはかつての「べ平連」の指導者で今日の「九条の会」の呼びかけ人であった小田実氏を失った。

この二人の死は、私を動かす。しかし私がここで読者に告げたいと思うのは、そのことではない。二人はその晩年に古代ギリシアの文化に深い関心をもっていた。それはシベリア抑留やベトナム反戦とは直接に係わりのないことのようにみえる。しかし二人がギリシア志向を共有したのは、全く偶然の一致でないように、私には思われる。

▪　▪　▪　▪　▪　▪

高杉一郎氏（1908－2008）は、捕虜として経験したシベリアの風物を狙いの的確な散文で鮮やかに描き出した。眼のさめるような臨場感。どれほど厳しい経験であっても対象との間に保たれる知的距離。そして折に触れそこにあらわれる繊細な温かい心。――しかもそれだけではない。

心あたたかいロシア人の評価と収容所と強制労働の条件のもとで押しつけられた（あるいは「教育」された）イデオロギーの拒否という記憶は、1950年の東京であらためて主張された。その頃の東京の知識層が左右に二分されていたことは、いうまでもない。「冷戦」は始まっていて、誰も「黒」か「白」か、どちらかであるはずだった。古代ギリシアはそのどこに位置づけられるだろうか。

小田実氏（1932－2007）は大学で古典学を修めた。日本の学生としては例外的に少ないひとりである。それから小説を書き、エッセーを作り、講演会で話し、役所の前で座り込み、ベトナム戦争について、米軍基地について、神戸震災いついて、イラク征伐について、憲法改悪について、その立場を明らかにしてきた。

最後の病床についてさえも、彼はインタビューを断らず、口述筆記によっても戦いをやめなかった、改憲論者に対し、死神に対し、まさにギリシア神話の英雄たちのように。その多忙の中で、入院まで、小田実は何をしていたか。ホメーロスの吟

唱した叙事詩『イーリアス』の日本語訳をあらためて作ることである。

▪　▪　▪　▪　▪　▪

高杉のギリシア志向は、英国の詩人、ロバート・グレイヴズの名著『ギリシア神話』の名訳を生み出した（Robert Graves, The Greek Myths　修正版、1960、邦訳1998）。訳業を果たした動機は、第一次世界大戦の戦傷兵であった原著者との共感も含めて、「これを日本語に移す仕事は戦争と抑留から生きて還った私に課せられた義務だ」と思ったからである（「訳者」あとがき）。すなわち『ギリシア神話』の翻訳は訳者にとって、単に知的好奇心の問題ではなく、人格の中心部分と深く係わるものであった。そうでなければ、誰もこれほどの努力を必要とする仕事を完成できなかっただろう。

小田にとっては『イーリアス』の訳を完成する時間がもうなかった。しかしその仕事に手をつけたとき、その話をする彼の声がいかに明るかったか。いかに未来が希望にみちていたか。「あれは反戦文学です」と彼はいった。そして「中村真一郎さんならわかってくれる」とつけ加えた。

何をわかるのか。『イーリアス』の中の「反戦」だけでなく（それを指摘したのは小田だけではない）、それが「文学」であることを。そして小田実という人間が市民の反戦運動に忙しく立ち回るだけでなく、「文学」をその根源において見つめ、そうすることで文学的に熟しつつあったことを。反戦はもちろん急務である。情勢は絶えず変わる。しかし『イーリアス』も急務でないことはない。「文学」の根源は二千年か三千年のうちには根本的に変わらないとしても。

要するに高杉一郎と小田実、この二人の同時代人には共通の特徴があった。移りゆく現実に敏感な反応と、動かない現実（たとえば人間の条件）に対する深い洞察。後者がギリシア文化への関心にあらわれていることは、上述のとおりである。

それはこの二人の場合に限らないだろう。たとえばフランスの詩人外交官、ポール・クローデルは「今、何を読んでいるか」という質問に「新聞と聖書」と答えていた。朝鮮戦争の報道でよく知られた米国の記者、I・F・ストーンは、ただ一人で書き、印刷し、配布した週刊紙の刊行でも有名だが、引退後は古代ギリシア・ローマの研究に熱中したという。

「現代」の情報に敏感な外交官、コラムニストは、かえって「古代」に強く惹かれるのかもしれない。そういうことは17世紀フランスの「近代・古代論争」にもあらわれていた。それは、おそらくある程度まで、普遍的現象であるだろう。

しかし欧米の「現代」は古代ギリシア文化――その哲学と神話――の基礎の上に築かれた、ということがある。同じ条件は、日本と中国の「現代」にはない。そこでギリシアの「古代」のどこが儒教文化圏の「現代」の発展に役立つか、という問題が生じる。

▪　▪　▪　▪　▪　▪

包括的な答えはここではできない。今は一例をあげて問題のおよその輪廓を示せば、ギリシア神話にしばしばあらわれ、悲劇が鋭く追求した局面は、神（神話）対人間（個人）の争いであり、戦いである。ここでは神の欲望が人間化されるが、その意志は貫徹する。人間（英雄）の意志は、神のそれに近づくが、それほど徹底し

ない。したがって戦いの結末は敗北に終わる。

その構造は、人と人とが争う近代劇のそれと違って、組織と個人が相対する社会的現実の構造に似る。ギリシア悲劇はその意味で、現代と古代をつなぐ糸である。

同じ糸は、東北アジアの古代と現代との間にはない。故にアジアは古代ギリシアに向かわざるをえない。たとえば木下順二はそのことを知りすぎるほどよく知っていた。そのあとに続くのが高杉一郎と小田実である。彼らとギリシア神話とは、容易に切りはなせない……。（評論家）」[(3)]

＜注記と考察＞

(1) ソークラテースの裁判と刑死（前399年）は、アテーナイ古典期における、その象徴的な事件であり、それはプラトーン（たち）の魂に火を点けるものとなった。そしてその彼らの探究の結実（その結晶が諸「対話篇」）が、以降の世界思想を照らし続けてきた。

(2) 堀尾輝久の、「教育の自由」の探究を主題とする論考「国民教育における「中立性」の問題」（1958～59年、堀尾『現代教育の思想と構造』岩波書店、1971年、所収）は、進行しつつある現代日本の公教育における矛盾（教育の自由と権力統制との矛盾）に対する思想的・理論的解明を意図して執筆されており、その意図故に、その論述は直接的には近代から始められている。そのために、堀尾の「公教育を「私事の組織化」としてとらえなおす」という探究は、一見すると理念型的概念操作のような（観念的な）印象を与えるかもしれない。しかしその論は、論文の冒頭の J.J. ルソーの思想の受け止めから始まり、論文全体にわたり、「個人」という世界思想を継承するものとなっている。論文中の下記の一文も、直接的には近代以降が思い描かれているのかもしれないが、「個人」の覚醒という世界史的経験事を継承するものとなっている。

「…このことに対して、教育が私事であるという原則が、教育の中立性の真実の要求を成立させる。この原則は、決して架空な哲学的原理からひき出されたのではなく、歴史的に、市民において自覚された個人的人間としての幸福を、現実的に獲得する経験的な自由の感情に根ざしていた。いいかえれば、それは、教育は個人の幸福のためのもの、という歴史の中でとらえられた経験的起源の思想である。もちろん個人の幸福は、一様なものとしてはとらえられないし、幸福の価値に対する確信や思想は、多様である。だからこそ、それは個人の内面にかかわる私事であることを要求する。私事を組織するということは、すべての個人の幸福の追求と教育とが直接に結びあうことであり、子どもの幸福追求の自主的能力の成長に、教育が責任をもつということである。そして、なにを幸福とするかはすべて個人がそれを定めることを承認しつつ、その能力の開花に平等の機会を保障する組織をつくることである。」（411p）

このように、堀尾の「公教育を「私事の組織化」としてとらえなおす」という考察は、一部にある批判の論説とは逆に、歴史的なもの（客観的なもの）である。むしろ堀尾の探究は、「個人」(=「人格」=「人間の尊厳」）の思想（「パイデイアー」の思想：イェーガー）の現代的な開拓そのものである。その周到な探究は、日本国憲法13条（個人の尊重、幸福追求権、公共の福祉）と26条（教育を受ける権利、教育の義務）及び教育

基本法（旧法）との不可分性を、つまり「個人」の思想と「教養・教育」の思想との不可分性を、意識して理解していくことを私たちに促してもいる。

なお、自由民主党の「日本国憲法改正草案」（2012年４月27日）では、現行法第13条の「すべて国民は、個人として尊重される。」を「全て国民は、人として尊重される。」に改めるとしている。（本継続研究（４）の＜全体の考察〔B〕＞の＜注記＞（１）を参照のこと。）

(3) 加藤は、この追悼文発表の年の終わりに自身も旅立っている。

Received : August, 21, 2017
Accepted : November, 8, 2017